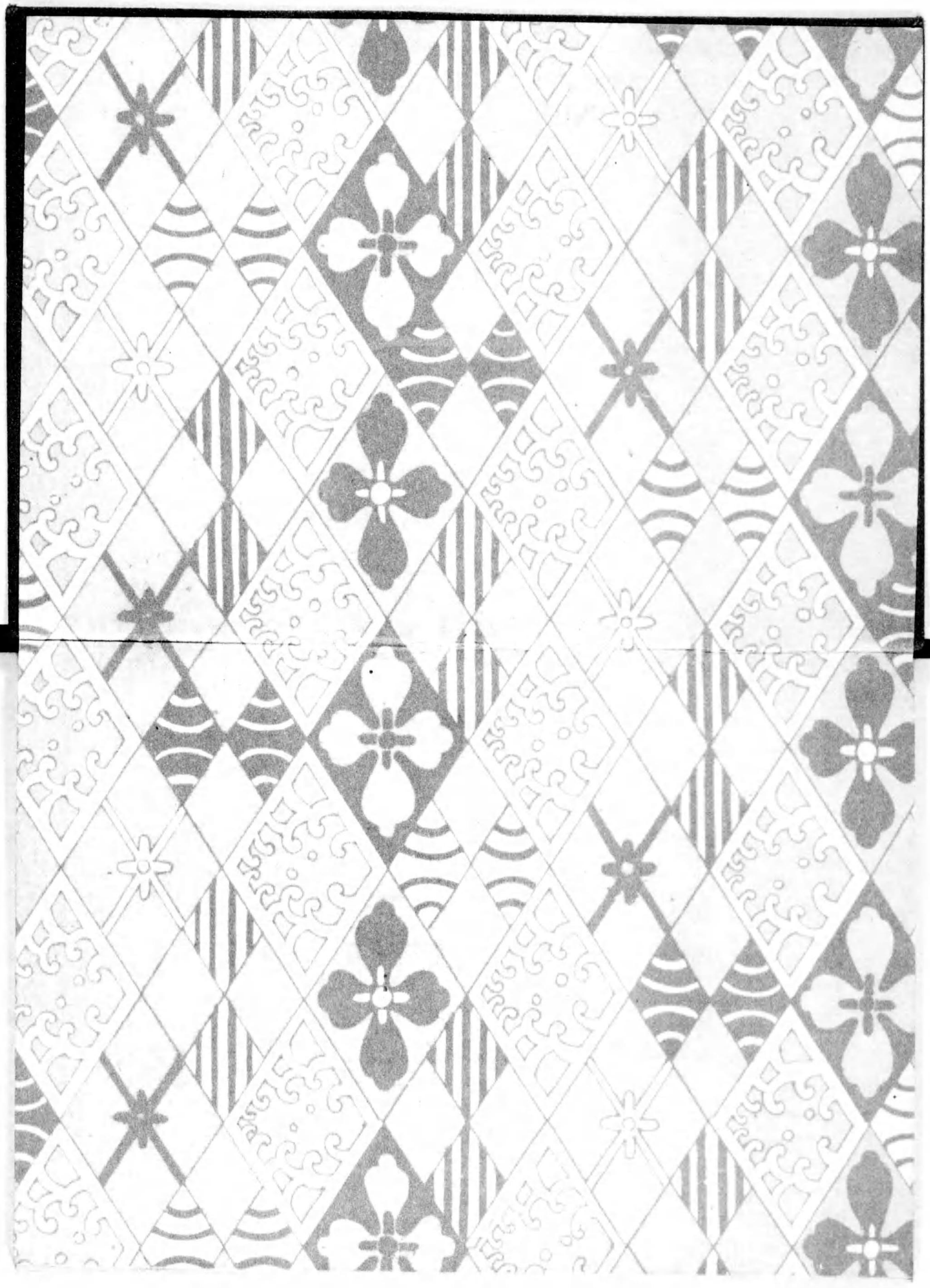
大正文庫

菊池幽芳著

二人娘

特100
975

始



特100
975.

三人娘

巫芳著

光
3. 3. 11
內交

二人娘

菊池幽芳著

壹

今しも奈良停車場の時計は八時を打ちぬ、今宵は風立ちて肌寒けれど、流石に三月の末なれば、三笠の山にかゝれる月影も、何となう霞渡りて見ゆめり、驛夫が振れる鈴の音も止みて、待合室に集ひ居りし人々も皆夫々、列車の中に入込みぬ、今や最後の笛と共に列車は大阪に向つて進まんとする刹那、二等切符を摑みしまゝ慌たゞしくプラットホームに駈込めろ一少女あり、汽車の走り出さんとするを見て、尙慌たゞしく列車に近寄らんとす、驛夫は斯くと認

めて危しと制しつゝ、早速に客車の扉を開きて押込むが如くに少女を突入れぬ之と同時に列車は勇ましき汽笛の音と共に進み出せり、少女はよろよろとして立場を失ひ客車の中に倒れかゝりしが、辛うじて席に在りたる青年紳士の手に依りて支へられぬ、少女は我身のはしたなかりしを恥づるが如く、少し顏を赤めて叮嚀に會釋を施し、其向ひに座を占めぬ、この青年紳士と云へるは年の頃二十五六と見ゆる洋服出立の男なるが、少女の支へし折、下に落したるパイプを拾ひ取りしガレッとを挿み、口に咬へつゝ不思議さうに少女を見やりぬ。

娘は目鼻立ち人並すぐれて美くして、服裝は善くはわかれど平生着らしきお納戸の縞物の上に、駱駝毛の肩掛を纏ひたる。貧しき人の娘なりとは見えず、愛嬌と云ばんよりは權のある顏に悲しみを帶びて、何となう穩かならぬ色ありぬ眼に涙の露さへ浮べ、新蝶々の鬢のほつれの頰にかゝるをば掻上んともせざ

りき、青年紳士は良暫し物云ひたげに少女の姿を眺め居りし後、

『貴孃は何方までお出になりますか』

と問出ぬ、少女は顏を擧て、

『ハイ、大阪まで』

と答ふ。

『貴孃は大層お顏色がお惡いやうですが』

『ハイ有りがたう』

『お加減でも惡けりやア有合の藥劑もございます』

親切なる言葉に少女は强て笑顏を粧ひ、

『いゝへ、どこも惡くはございません、少し氣に障つた事があるのでいつそ大阪へ歸らうと存じまして、なにもうつまらない事ですから』

『ハア何ンな事ですか、いやなに私も大阪迄歸りますが貴孃は何の邊へお

歸りですか、大阪にお宅がおありなさるのですか』

少女は少し逡巡ひたる後。

『あの、妾の參る處は田舍でございます、大阪ではなくツて都島なんでございます』

『えッ、都島ッ、貴孃は都島にお住ひですか』

と驚ろき顏なる青年紳士をいぶかしげに見やりて、

『ハイ』

『都島は何の邊にお住ひですか、私もあの邊のものですがつい是迄貴孃を存じませんでした』

『さうでございませう、妾は都島に長く居つた事はございませんから、妾の宅は水源地のすぐ近所です、大方御存じでせうが野崎純藏の宅でございます』

青年紳士は思はず膝を進めて、

『野崎純藏さんのか、野崎さんとは御親類ですか、あの人に令孃のある事はつい聞きませんでしたが』

しげ〳〵と少女の顏を見詰むれば、此方はきまり惡氣に、

『ハイ、妾は野崎の娘ではございません、たゞ世話になつて居るのでございます』

青年紳士は何か心にうなづきつゝ、怪〳〵くも暫し羞俯むきて長き吐息を漏せしが、次第に高まり來る不穩の色を強いて笑顏に紛らし、

『野崎純藏の、いや野崎純藏さんの事なら善く存じて居ります、あの人には純一と云ふ私程の息子が有ますれ』

『ハイ、その純一さんは可愛相に、まア氣の毒な事をいましました』

青年は顏色を變へて、

『あの男が可愛相とは、何かしましたか』

『勘當をされたと云ふ事です、今年東京の高等學校を卒業して歸つた許ですのに、妾は奈良に居りますので知りませんでしたけども』

青年紳士は何故か嬉しさうにほゝ笑て、

『併し一人息子ですからお父さんも直に察へ入れるでせう』

『實は私は純一さんの親友ですが、お差支がなくば貴嬢のお名を承はりたいものです』

『ハイアノ江口花枝と申します』

此時汽車は次の驛に着き二三人の乘客入來りて二人の傍らに座を占めたれば青年紳士は心ならずも口を噤みて語らざりき、江口と云へる少女も言葉を出さゞりき、時時青年紳士の顏を偷み見るは意ありてか意なくてか、天王寺より二人は城東線に乘更へしが程なく列車は野田停車場に着きぬ、九時半ばか

りならん、二人は茲にて下車し互に叮嚀に會釋して相分れぬ、青年紳士は

『江口花枝、江口花枝、果してさうであつた』

と呟やきつゝ傍らの便所に入り、程なく出來りしが、此時車にも乘らずして只一人都島の方に進みゆく少女の姿をふと其目にとめぬ、

『どれ少し見送つてやらうか』

貳

九時半許りなれば夜は更しとには有れど、風はいよ〳〵吹すさみて、寒さも一しほ增りたればにや、都島に通ずる新道を往來う人もなく、瀛車より下りたる一群すら申合せたらんが如く、皆野田町の方を指して歩みを運びぬ、少女は只一人足早に新道を辿りつゝ其中程にさしかゝりしが、この時道傍に植付けたる若木の後ろよりぬッと出たる、手拭を眼深に被むりて尻からげを爲

せし一人の曲者。

『おい姐さん、少し待つて貰はうか』

少女はぎよつとして立留まり、

『貴君はどなた、何か御用ですか』

氣味わるげに見返れば、

『私は長柄の吉と云ふ遊人さ、賭場からの歸り途、何でいゝ鳥は無いかと網を張つて居た所だ』

とつと少女に寄添ひて月の光りに其顏を覗き込み、

『いゝ素的な上者だ』

少女は殆んど縮み上りながら猶弱味を見せじと、

『女と思つて馬鹿におしでないよ、手出しをすればこつちにも用意が有る、ごれそこをお通し』

『どッこいさうはなるまい、長柄の吉の眼にかゝつたが最後、素通りをさせる事じやアれへ』

少女は聲を顫はして、

『じやア何うしろと云ふのだへ、お前の欲しいものはあげるから通してお吳れ

曲者は鼻先で笑ひながら、

『いゝや追剝じやア無いから心配するにやア及ばれへ、お前さんの顏を見て私や何にもいらなくなつた、その代り一ッ願ひを叶へて貰はうか』

『えッ、願ひとは』

『コレさ野暮を云ふもンじやアれへ』

といきなり少女の帶を摑めば此方は一生懸命、

『アレー』

と聲を擧げて走り出さんとすれど、鷲に取られし小雀同然、藻掻けばとて逃

出らるゝにもあられば、叫べばとて助けの來るにもあらず、あはれ少女は曲者の爲其身を汚されんとする、此危急の瞬間に、誰とは知らず骨も挫けよと許り曲者の足を拂ひたるものあり、曲者は覺えず聲立てゝ少女を手放しさま地上に倒れしが、顏をしかめて見上ればすでッきを手にしたる洋服出立の男つッ立居れり。

『うぬ、何をしやがる、善くも長柄の吉を擲つたな』

立んとすれども容易に立たれず、

『女と思つて無禮ゐ働らく不埒者め、さアこが相手だ、手向ひするならして見ろ』

『何だ小癪な』

と立上らんとしては、

『あいたゝ』

とまた倒れぬ。

『ざまア見ろ』

笑ひながら少女に向つて、

『江口さん、花枝さん、もう大丈夫です、私がお宅まで送つて上ます』

と云ふは紛れも無き先刻の青年紳士なり、花枝は嬉しさ何に譬ふるものもなく、

『何うも何ともお禮の申しやうもございません』

『いやなにそのお禮に及ぶものですか、どれ參りませう』

と連立つて立去る後ろより曲者は聲を掛け、

『この二才奴、長柄の吉を覺えて居ろ』

野崎純藏と云へるは、此邊に聞ゆる資産家なるが二十年前に妻を失ひ、其後は獨身にて今日を送れるなり、妻の忘紀念として殘れるは、純一と云へる當年二十六才の男子、これは何故か純藏の氣に逆らひし事ありとて、一ケ月以前、この家より追ひやられたりといふ、純藏は早や六十歳の老年なるが、妹のお鶴とてこれも寡婦となり居る婦人、わが子のお文と云へる娘盛りを連れて同居し、家事萬端の採配を振り居れり、花枝と純藏との關係は明らかならねど純藏が無二の友垣としたるものゝ忘紀念にて、自分は其後見となり居るものなりと純藏自らは語れり、左りながら花枝の此家に親しく出入するやうに成りたるは、ついこの頃の事なりと云ふ。

今しも純藏お鶴お文の三人が團欒せる一室の中には、京都行と云ふことが話しの種となり居るらしく、

「それならお前達は明後日頃出掛るのか、花枝が來て居ると一緒に連て ッて貰

うのだが」

「他人が一緒に往つては面白くないからお文と二人の方が善うございます、貴兄は又花枝さんがお氣に入りだから貴兄が連て ッてあげるがいゝ、れへお文さうぢやア無いか」

お文は左なりとて云ひ兼たる樣子にて、

「へえ」

と何方つかずの返事を爲しぬ、純藏は少し機嫌を損じて、

「いやそれなら連て ッては貰はうまい」

「連て往かぬとは申しませんよ、それでは奈良からお呼びなさいな」

「いゝへ、呼ばずと善い、お前達には賴まぬ」

と腹を立て居る處へ、次の間に足音たてゝ、

「伯父さん」

と聲をかくるは思ひも寄らぬ花枝なり。

三

思ひ掛なく花枝の入來りしに、お鶴はお文と顏を見合して、眉を顰むるに引更へ、純藏は機嫌を直し、

『おゝ、花枝か、今頃何うして歸つて來たのだ』

とにこ〳〵しながら、

『何ぞ急用でも出來たのか、若い娘が一人で夜中に歸つて來るといふ事があるものか、何ンな間違ひがあるまいものでも無い』

と今度は叱るが如く強き言葉にて云ひたれども溢るゝ許りの慈愛は其中に籠れり、花枝は口籠りつゝ、

『ハイ、用が出來たのではございませんけれど、みンなに色々な事を云はれた

上先生に叱られて悔しくつて仕樣がありませんから歸つて來ました』

何だ、ソンナ事で歸つて來たのか、そンな我儘で歸つて來たのなら、一日も置く事が出來んぞ、明日は歸つて貰うがいゝか』

花枝は悄然として差俯むく、暫らくすると純藏は又思ひ直せる樣子にて。

『いや、お前が奈良に居るのがいやと云ふなら、是からは大阪で勉强する事にしてもいゝぞ』

いつも强さうな事を云つてみゐにすれども、その後より直に脆く碎くるが純藏の僻なりとか、さてこの花枝の身に就いて詳しき事は知られど、幼なき時より父もなく母もなく、只姆一人の手に人となりしが、昨年姆の身まかりしより、これまで教育を打任し居たる左る婦人の私塾に寄宿せしめ居たるなりとか聞きぬ、幼なき時より純藏が附屆けをなし居たれど、純藏は嘗て此事に就て人に語りし事なし、お鶴母子の花枝を知りたるも全たく昨年來のことなり

けり。

純藏は恰かも我孫の如く花枝を愛しめども、斯くまでに愛しむと云ふ事をお鶴に悟らゝを好まず、花枝と隔てもなく物語るはいつも對座の時のみなりお鶴は素より此事實を知り居る故に、却つて其感觸を害し、花枝に對してよそ〳〵しく取なすに至りぬ、今夜も純藏の意を察したれば、直ちに立つて我居室に退きぬ、お文もまた母に倣ふて立上り、花枝に向ひて、

『花枝さん、お話しがすんだら、妾の室へおいでなさいましな』

と世辭を振蒔いて座を退きぬ。

純藏は二人の立去たる後に一しほ聲を優くし、

『もツと此方へ寄がいゝ、今夜は中々寒い、まア火でもあたれ、何だ、身体が暖かだと、ウム若ものはさう無ては困る、髮が大層ほつれてゐるが少し身じまひをするがいゝぞ、女のたしなみだからな、いやお前は顏色が惡いな、何

だ其衣服に泥は何うしたものだ』

花枝は始めて氣が付立上つて椽先に泥を拂ひ、座に戻つて、

『伯父さん、今妾はそこの新道で惡漢に捕まつて、まア何う仕やうと思ひましたわ』

純藏は驚ろきて、

『惡漢につかまつた、だから云はない事じやアない、若い女が一人で歩るく程險呑な事はない、それでお前はどうしたのだ』

花枝は涙ぐんで、

『その時幸ひに汽車で一緒になつた若いお方が、何時の間にか來て下さつて惡漢を追ひかへし、妾をこゝまで送つて來て下さいました』

純藏は嬉しさに堪へず、

『それは實に仕合だつた、助けて呉れた人の名を聞いたらうな、早速已が禮

にいつて來る、お前はなぜ其人を連れて來なかつた」

花枝はわれ知らず顔を赤めて、

「はい、お名を伺ひましたけれど、たゞ此邊のものと許りで決して仰しやらないンですもの、是非お寄り下さいと申しても見ましたけれど、お聞入なさらずに櫻の宮の方へ歸つてお仕舞ひなさいまして」

老人は嗟嘆して、

「それは殘念な事をした、いや感心な男だ、それが隱德家と云ふものだ、此邊のものと云ふならば、其中にはいづれ又遭ふ事があるだらう、其時には是非とも引張つて來いよ」

「それでもそんな事が出來ますものか」

「何ンな男だつた、好い男か、醜い男か」

花枝は顔を赤めて、

「そんな事は知りません」

四

お鶴とお文とを望みの如く花枝を伴はずして京都に行きぬ、二週間滯在の見込の由、二人の立ちたる夕べ、花枝は只一人庭の邊りを坐ろ歩るきなし居たるが、あまりに月影の面白きにつり出されてか、庭木戸を開き其儘つと門外に出行きぬ、居室に籠りて玻璃越に花枝の姿を注視し居たる純藏は、花枝の木戸を開ゆきたるを見て眉を顰め、直樣立上りて自分も庭下駄を穿ち、花枝の出たる木戸より門外に出しが二十歩程先に花枝の姿を認めぬ、純藏は掛念に絶ざる面持にて、

「田舍に育つたもので淋しいのを何とも思はぬには困つて仕舞ふ、此間も危い目に遭ひながらまだ懲りないと見える、此頃は水道の修繕で人夫が夜仕事

なして居から、何ンな亂暴を働らくかも知れぬ、何れ已がついて往つてやらう」

と花枝の跡より見え隱れに從ひ行きぬ。

まだ宵の程なれば、淀川堤にちらほらと往來の人影あり、春なれば霞み渡りて櫻の宮より造幣局のあたりを朧ろにし、近く源八の渡しに懸渡せる、鐵橋の靜かなる川水に影を浮ぶる、櫓拍子面白く川船の上り行く、何れか心を慰むる眺望ならぬは無し、花枝は堤の上を辿りつゝ櫻の宮の方をさしてそゞろに歩みを運び居りしが、心の中には先の夜の事をも思ひ出でしならん、青年紳士の面影も浮び出でしならん、左れどまだ宵の程にて行かう人もあり、水道工事の篝火さへ明かなれば淋しとも思はず、暫し足を停めて立留り居しに此時花枝の顏を覗き込やうにして過行たる人夫あり、花枝は思はず身震して、

「嫌な人だ」

と云しが、始めて我身の不注意なりしに氣付、急ぎ踵を返さんとせしに、堤の下にて五六人の人夫が何事をか動搖く聲を聞ぬ、花枝は之にも膽をつぶして駈出さんとする目前に、嬉しや純藏の急ぎ足に來るを認めぬ花枝はほゞと安心して

「おゝ伯父さん、善く來て下さつた」

と純藏の傍に寄添はんとする時、こはそも如何に彼の人夫の一群はどやく、と堤に上り來り矢庭に花枝をひゞ抱つて川原に下ゆきぬ、純藏は狼敗へながら左はさせじと追ひ縋れば、二三人の人夫はまたもや現はれ來りてたけり狂ふ純藏を引き分け、鐵拳にて亂打したる上、地上に突倒して逃行けり、左なきだに老人の打ち處や悪かりけん、立んとしても立つ能はず、只無念の涙を揮ふのみ、下には花枝の叫ぶ聲、身を切る刄の如く純藏の胸に響き渡りぬ。

此時川原を徘徊ひ居たる一人の男あり、女の叫ぶ聲に驚ろき乍ら耳を傾けしが

次の叫び聲の聞ゆる間には早や聲する方に駈行きぬ、見れば六七人の人夫一人の少女を捕へて無体の暴行を爲さんとす、かくと見るや奮然として怒りを爲したる彼の男は大喝一聲、人夫の中に割つて入れば、人夫は之に不意を打たれて色めき立しが、其一人なるを見て侮り、

『何だ生意氣な野郎だ打て〳〵』

と異口同音鐵拳を固めて此男を亂打せんとせり、男は物ともせずステッキを振廻して之に抗せしが、哀れや多勢に無勢、如何とも詮方なく見えし處に、幸ひにも一人の巡査駈來りぬ、人夫は斯くと見るよりこは叶はじと思ひたるか少女を捨てゝ一目散に駈出せしかば、巡査は直ちに之を追行きぬ此間に彼男は少女を助け起せしが、顏見てびつくり、

『や、貴孃は江口さんだ』

花枝も見上て打驚ろき、

『おゝ、貴君は』

彼男は云迄もなく先の夜の青年紳士なりき花枝は涙ながらに、

『重ね〳〵誠にどうも』

と禮を云ふも口の中、其喜びも推測られたり。

それは扨措て純藏は苦痛を忍びて漸やく櫻の下に這寄り、幹を便りに立上り片唾を飲んで此有樣を眺め居りしが、程なく男に連れられて無事に上り來る花枝を目前に見たる喜び、何に例ふるものもなく、我身の苦痛をも打忘れ、

『おゝ、花枝か』

と涙聲になつて叫びぬ、花枝は純藏に向ひて、

『伯父さん、何うぞ此お方にお禮を云つて下さいまし、此間新道で妾を助けて下すつたお方でございます』

と云へば、

『いやお前に云はるゝ迄もない、何方かは存じませぬが』
と皆まで云はせず、
『お父さん、善く御覽なさい、私です、純一ですそのお禮には及びません』

五

純藏は驚ろいて彼の青年紳士の顏を眺め。
『おゝ、そうだ、純一だ、よく花枝を助けて呉れた、花枝、お前はまだ知るまいが是は悴の純一だ、譯が有つて寄附なかつたのだが今日からは許してやろぞ』
花枝は呆れ果て夢に夢見る心地。
『まア貴君が純一さんでございましたか、少しも存じませんで』
と今更に恥かしさも增りてうじ〳〵と會釋しぬ、純一は笑ひながら、

『此間お名乘申さうかとは存じましたが、勘當の身ですから少し遠慮しまして、いや花枝さんそんなにお禮をされては困ります、内輪同士ですから』
父に向つて、
『お父さん、貴父も何うかなされましたか、若やぐと人夫等に』
と云ふ傍より、花枝も氣遣はしげに、
『おや、まア伯父さん、何處かお怪我を爲さいまして？』
と双方より勞はれば、純藏は張合拔すると共に急に身内の痛みを覺えて、
『あいた、やられた、胸を、胸を打たれたのが痛んでならぬ』
と純一の肩によろよろと凭れかゝりぬ、純一は色を變へて、
『澤山に痛みますか、こゝでは仕樣がないから兎も角私が負ふてお送り申ます』
花枝も顏を青くして、

『伯父さん何うなさいました、しつかり遊ばせよ、まア心配な、純一さん、早く家へお連れ申して下さいまし』

純一は人夫等を捕へて腹癒せんと血氣にはやる心は山々なれど父の樣子の氣遣はしさに、無念の思ひを忍びて純藏を我家に運び、兎も角も寢床の上に臥せ、早速使を醫師の許に走らせぬ。

程なく醫師も來りて診察し、殘る方なく手當なもなしぬ、其言葉に依るに、心臟を打たれたるが第一の怪我なれど左程氣遣はしき事は無し、老人故如何に變すまじきものにもあらねど、十中の八九生命にかゝはる如き事はあらずといふ其中苦痛も止りたるが純藏はすや〳〵と眠りに就きたる樣子に、純一始め皆憂の眉を開きぬ、此夜花枝は、看護に夜を明せしが、翌る日は殊の外純藏の容子善ければ、大方ならず打喜びぬ。

病人の望みとて純一と花枝とのみ多くは其枕元に看護しぬ、又の次の日純

藏は二人を並べて笑しげに、

『お前達二人がさうして並んで居て呉れると、己は痛みも何にも忘れて仕舞ふ、コレからは仲を善くして貰ひたいな、それが己の樂しみだから』

かく云はれて花枝は恥かしさに差俯むきぬ、純藏は重ねて、

『純一、己の外に花枝を世話をするものはお前許りだ、一生面倒を見てやつて貰ひたいがどうだ』

といふ、花枝は顏を赤め乍ら偷むが如く純一の顏を見やりぬ、純一は至つて簡略に、

『ハア』

と何ともわからぬ返事をなせしが、顏は少し青ざめ居りぬ、純一が意の中は素より知るを得ざれど、花枝は何と推してか差俯むきて、吐息をつきぬ、斯く並べたる處好一對の雛人形なれど、二人は果して行末を契り得るやいなや。

花枝は其素振にも見ゆるが如く今は心を捧げて純一を慕ふなり、純一は花枝を憐れとは見ざるか、花枝と起伏を共にしてより、不思議にも却つてよそよそしくなりゆきぬ、花枝はいたく之を悲しめども、こは病人の上を氣遣ふあまりに我方にはしみ〴〵と言葉もかけ玉はぬなるべしと、われと道理を附けて自ら慰めぬ。

六

純藏の容体は程なく恢復す可しと想ひ設けたるに引かへ、四日目の朝より變狀を呈しいとも氣遣はしき有樣となれり、純一花枝兩人の心配は云ふまでもなく、家婢奴僕に至るまで皆憂に閉ぢられて一家は陰氣の淵に沈みぬ、左なきだに夕ぐれ方より空に暴模樣となりて雨は落ねど、風激しく、木々の梢の騷ぐ音、窓戸の軋る音、只物凄き許なり、純藏は其身の旦夕に迫りしを悟りて、遺言する事あればとて他人を退けて純一を呼寄せぬ、程なく純一は父の枕邊に跪まづきて頭を下げぬ、純藏はそも何をか遺言せんとする、素より他人を退けたる事とて誹知る事を得されども、十分許を過ぎし後、純藏の荒々しき聲次の間に聞えぬ。

『それではこれ程云つて聞かせたのにまだ得心をせぬのか』

次に純一の聲として、

『外の事なら何ンな事でも御遺言に從ひませう、けれどもこれ許りはどうぞ御勘辨を願ひます、あの嬢の行末を御案じなさるなら、私は立派にお引受け申し相當の人に緣づけます、これはお賴みが無とも決して御心配はおかけ申しませぬ、私は花枝さんを嫌つて居るといふ樣な事は尠しもなく、丁度自分の妹のやうに思つて居りますので、將來も必らず兄だけの慈愛を盡します、たゞ花枝さんを妻にする事だけは」

『それなら己が、終焉になつての命令をたつて聞入れぬと云ふ乎』

『どうあつても妻にせぬとは申ません、けれど夫婦の愛のないものが一緒になつては却て後々の不幸と存じまして』

『默れ、夫は理屈だ、妹だけに愛して居るものならば、夫婦になれば夫婦の情愛が出なくッて何うするものか、好し、辯解をするな、妻にせぬならせぬで善い、その代り未來永く貴樣と親子の緣を切る、己の死目にも遭はせぬ、今ッからさッさと出て行つて貰はう』

是にて双方の言葉は暫し途絶え居りしが、良あつて決然たる純一の聲。

『お父さん、決心致しました、それほど仰しやるなら私の身を犧牲にして花枝さんを妻に致します、併し結婚は一年間だけ延して頂きたうございます

『ウムそれでこそ己の息子だ、が一年延せとは何う云ふ積だ、なぜ今己に安心させぬのだ』

『お父さん貴父は私の氣象を御存知でありませんか、如何なる事情があらうと、一度決心したからは決心を飜へすやうな男では有ません、花枝さんを妻にして一生を安樂に過させます、只一年だけの猶豫を願ふので』

『よしそれならこゝで盃だけをして置け』

『ハイ』

純藏は次にお增と云へる老女を枕邊に呼よせぬ、この女は年久しくこの家に奉公して忠實に立働らきしを以て純藏の心を得、今は隔てなく宛ら家族の一人となり居るなり、何事に限らず、純藏はお鶴よりも却つてお增には心置きなく打任するを常とせるなり、今しもお增の入來りしを見て、打喜びたる樣子にて、

『お增、お前を呼んだのは外でもないが、今こゝで純一と花枝に盃だけをさせようと思ふ、純一は得心をした、花枝にはお前から云つて吳れ、あれは純

一を嫌ふやうな事はあるまい』

『それは誠にお目出度うございます、なんの旦那様、若旦那様を嫌ふお娘がございますものか、花枝さまの身になつたならどれ程のお喜びでございますやら』

『そして得心をしたなら直に用意をさせて貰はう、お増、己は嬉しいぞ』

『誠に結構でございます、どれ早速花枝さまをお喜ばせ申しませう』

お増はにこ〳〵しながら、花枝の居室を訪づれぬ、何を憂へてか花枝は悄然と膝を組みて差俯むき居りしが、お増の入來りしを見上たる眼の中には涙の露を浮べ居たり、お増は訝かりながら、

『まア貴孃どうかなさいましたか』

と問へば、花枝はもじ〳〵しながら、

『伯父さんが心配で』

と答へたれど、あながちそれのみの憂ひにはあらじ、

『その伯父様からのお使ひでまゐりました』

『伯父さんからのお使ひとは』

『まアお喜びなさいまし、貴孃は若旦那様の奥様とおなり遊ばすのでございます』

花枝はなぶらるゝと思ひたるか、顔を赤らめながら、

『あれ、お増があんな事を』

七

お増は眞面目になりて、

『あれ花枝さま、冗談ではございません、旦那様からの仰しやりつけでございます、貴孃は直にお盃の御用意をなさらなければいけません、尤も本式で

はございませんけれど、今日は固めだけをなさるんですつて」

花枝は嬉しいやら恥かしいやら、

「お増夫は本當かへ」

「なんの増がうそを申しませう、まア貴嬢のお嬉しさうな事」

「あれ、知らないよ」

とあどけなく云しが、何を思ひ浮べてか、急に色を青くして、

「だけれども、お増純一さんは承知をなすつたのかへ」

お増は手もなく答へて、

「そりや若旦那樣が承知をなさらないで、花枝さまのやうなお方とお盃をなさるのは男の果報でございます」

花枝はいつそ涙ぐんで、

「妾は本氣になつてきくのだよ、そンな事を云はないでお吳れ、それでも純一

さんはちつとも妾を思つては下さらないもの、れへお増、お前は何う思ふ」

お増もすぐには答へかねて首を傾むけ居れば、花枝はホロリと落して、

「妾やア心配でならないよ」

お増は慰め顔○

「そんな事のある筈はございません、貴嬢、まア考がへて御覽あそばせ、貴嬢が奈良からのお歸りに新道で惡漢にお遭なされた節と云ひ、堤で御災難の時といひ、若旦那樣のお働らきは、貴嬢を愛しいと思召さいで出來る事でございませうか」

戀に惱める身はつまらぬ事も氣になれば、僅かの事にも引き立てらるゝ習ひとて、お増の此の言葉に良力强さをも覺え、其の夜の事を繰返すに、汽車中にての優しき言葉と我身の危急を救ひて門前まで送吳れたる時の情けある仕打とは彷彿と胸に浮び、よし我身を愛せぬ迄もいぶせきものとはし玉はざらんなど

思ひ浮べぬ、お増は重れて、

『花枝様、貴嬢はこの頃の若旦那様の浮々なさらぬのを御覧遊ばして、失禮なからお考へ違ひを遊ばしたのでそざいませんか、それは大旦那様のお悪い故御心配を遊ばしておいでなさるのです、平生は妾などを捕まへて色々と冗談を仰しやつてですけれど、此四五日はちッとも物を仰しやいません、それも何よりの證據でございます』

此言葉は花枝の爲めに千鈞の重みあり、左もあらん、左もあるべし、純一の情なきはわれに疎きにあらずして、父の様子を憂ふる餘りに出るならん、花枝は涙ながらに亨爾と笑みて、

『あゝ妾もさうかとも思ふよ』

『ハイそれにきまつてます、さア、コレで花嫁さんの氣も濟んだ』

『あれ、またそンな』

笑ふ目元に紅ゐのさしゐ、

素より略式だけに藍鼠の三ッ紋のみをまとひ、恥かしさが胸一杯にて、お増に手を取られ、純藏の寢間に通れば、男は流石に五ッ紋の羽織を着流し仙臺平の袴をつけて、はや純藏の傍らに跪づき居れり、花枝は只夢心地にてお増に助けられ座に就さしが、純一は頭をうな垂れて花枝の方を見向かんともせざりき、軈て固めの盃も濟みたれど純一の手は只機械の如く動きたるのみ、顔は青ざめて生る人としも思はれず、また花枝よりは幽かながらも幾久しうと云ひたるに引かへ純一は遂に一語をも發せざりき、さても此盃は日出度終りたりと云はんか、不吉に終りたりと云はんか、お増も純一の冷やかなる有様には眉を顰めぬ、哀れなる花枝の胸の中は如何、此室に入來りし時の麗はしき面ざしはそのかげもなく、さても此處を立去る時の青ざめ居りし事より花枝はわが居室に入るや否や忽ちそこに泣倒れぬ、世の中に自分程悲しきものは

なからんと思ひぬ、如何に伯父様の氣遣はしければとて、それはそれなり、この身に言葉をも掛玉はぬは、妾にお心なければこそ、さるにても何故にこの縁を諾い玉ひしぞ、そのお心の今は恨めし、明日よりは如何にして面を合はさん御身よりお言葉をかけ玉はぬにそもこの身より何と云出らる可き、今宵よりはつらき悲しき眼をのみや見む、お增に顔を合はさんも面目なしなど、思ひ亂れ居る折しも、玄關に勇ましき車の音聞えしが、忽ち西京からのお歸りと叫ぶ下婢の聲す。

八

お鶴母子は電報に接して、只今西京より歸り來りしなり、二人は直に純藏の寢間に赴むき見れば、醫師を初め看護婦迄つき從ひ、兼て遠けられ居たる純一さへも枕元に侍し居りぬ、此時純一は入來りしお文と顔を合せしが、お

文が莞爾と打笑みたるに引變へて、自分は物に怖れしかの如くに顔色を變へぬお鶴は純一を見て、父の爺篤故に許されたるならんと思へり、お文もかく思ひしなるべし。

純藏はお鶴に云ひ聞かす事ありとて、只純一のみを留めて、他人をば退けぬ何事を語りしかは知られど、純一を花枝と取合はしたる事をも語りたる可くわが亡き後の家事をも托したる可し。

お文は獨り我居室に赴むき、衣服を着更へんとて、簞笥より平生衣を取出し、帶を解かけしが思ひ出した樣に、

「あゝ、よさう、純一さんに遭つてから着かへやう」

と呟やいて帶を引き締め、姿見に寫して衣紋を繕ろひ、髮の後毛を搔上げぬ、顔は少し痩形にて色白く鼻低からず、人並に優りたる容顔なれど眼にどことなく、凄味あり、雅かといふ風にはあらず、自分は十七と云ひ居れど、口善惡な

き下婢等は、丁度には確ならんなど噂し合へりと聞く、そは兎に角に今しも鏡に寫したる其姿今紫小紋の華美なる好みに、お納戸地へ亂菊模樣を置し金入繻珍の帶を締めて、髪を高島田に結びあけたる、流石に美くしき姿なりお文は自らもわが姿に滿足したるかの如く打ほゝゑみ、

『まア純一さんがお歸りなすつて居つて何んなに嬉しかつたらう、此間中も伯父さんに内々では會つて居たけれど、ほんの時たまで焦ッたくッて仕樣がなかつたわ、それはさうと今妾を見て變な顏をなすつたのは、何うした事かしら、何だか厭な氣持がしたわ』

と呟やき居る處へ、母のお鶴は慌たゞしく色を變へて入來れり、お文は驚ろいて、

『お母さん、何うなすつたの、伯父さんが若しや』

母は意地が燒けると云ふ思入にて、

『いゝえ、そんな事ぢや無いよ、お母さんはもう腹が立つて、腹が立つて、ほんとにお前の伯父さんにも呆れて仕舞ふよ、純一も亦純一だ』

お文は安からぬ思にて、

『お母さん、まア何うしたのですか、早く話して下さいよ』

『お母さんは純一とお前の仲を知つてるよ、知つて何とも云はないで置いたのは此方にも腹があるからさ、今更純一を他人に取られては母子の浮ぶ瀬が無い許りか、娘が疵物にされて仕舞ふぢやアないか』

と獨言のやうに云ふ、お文は眼色を變へて母を見詰め、

『お母さん、純一さんが何うしました』

『お前の伯父さんの差圖で、花枝と純一はたッた今夫婦の盃をした許りだとさ、尤も固めだけださうだけれども、最早何うにもなりはしないよ』

お文の耳には宛ら迅雷の落ちゝりしが如し、われ知らず飛上りて血相を變

へ、

『えッ、花枝さんが、あの純一さんを……いやいや妾が決して夫婦にはさせないから』

●　●　●　●　●　●

純藏は何事をか花枝に云ひ遣さんとて下婢に花枝を呼來れと命じ、又も他人たぼ追けぬ、然るに茲に恐るべき大錯誤こそ起りたれ、下婢は花枝を呼び來れと命ぜられたるものを全くお文とのみ思ひ違ひ、花枝の居室にはゆかず、お文の居室に赴きて命を傳へたり、お文は母と共に我身にとりては一大事の談話最中なりしが、遂に如何なる事ならんと取敢へず、純藏の居室に赴きぬ、折節室内の燈火朧ろにして、かすみ渡りたる病人の眼には素より其お文なるを辨ぜん事覺束なく、全く花枝とのみ思込み、幽かなる聲を掛けて、

『おゝ、花枝か、善く來て呉れた、さアこゝへ寄れ、花枝』

といふ、お文は忽ちわが身の招かれたるにはあらずして、下婢が花枝と間違ひて自分を呼びたるものなるを知り、打腹立しさに、

『花枝ではございません』

と云ひしが、此言葉は病人の耳に入らざりしと見え、純藏は一向無頓着にて、

『花枝、さアこちへ寄れ、お前に話して置かねばならぬ秘密がある、この秘密を話さぬ中は己は死なれぬ、息子にも話さぬ、話すのはお前許りだ、花枝耳を〳〵』

此時お文の胸には惡心忽ち稻妻のごとく閃めき渡り、

『ハイ』

と答へて顔を見せぬやう純藏の口元にわが耳を寄せぬ。

九

純一と花枝に盃をさせてより後は、安心をしたる故か、目に見えて純藏の衰弱甚しく、今しもハイと紛はしく答へたる小さき聲にてその主を辨ずる事能はず、ランプを背にして耳を寄せたるお文をば全く花枝なりと思ひこみ、何事をか數分時の間喃やけり、語り終りし時お文は恐ろしく顏青ざめて思はず何とも知れぬ嘆聲を發したれど、純藏はそれだに聞わくるの力もなく

「花枝、わかつたか、許してくれ、これでおれも安心した」

と其儘眼を閉ぢぬ。

お文は純藏の容体を氣遣ふ素振は露程もなく、冷やかに死せるが如きその顏を見やりて、病室を出しが、わが居室には赴むかずして廊下の中程に立とゞまり、四邊を見返りながら、

「お母さんに話さうか、話すまいか、いや〳〵これは話すまい、誰にも話すまい、この話は妾が死ぬ時に一緒に墓場へ葬むつて仕舞はふ」

と云ひ終つて氣味わるき神經的の笑ひを漏らしぬ。

「何のやうな譯があらうとも純一さんを花枝に取らせはしない、全体純一さんは何ンな心でおいでなさるのかしら、まさかに妾を捨てる程の薄情はなさるまい、是非とも遭つてお心を伺はなければならぬ、あゝ心配な事になつて來た」

と呟やきつゝ、憤りに堪へざるが如く、無意識に廊下の彼方に進み行きしが、計らずも薄闇がりに突立居たる純一と顏を合せぬ。

「おゝ貴君は純一さん、先程はお目出度うございます」

と涙聲にて先づ恨みを云へば、純一は太き息をつき、

「お文さん、そりやア何を云ふのだ、何がお目出度いのだ」

お文は倒るゝ如く純一に凭れかゝりて、

「ですけど貴君は妾を何うして下さいます」

「何うして と云つて」

「貴君はもう妾を捨るお考へなんでせう、ハイ妾は花枝さんの樣に別嬪さんではございませんから」

と、お文は飛のいて柱に身をもたせ、しく〳〵と打泣たり。

「お文さん」

と純一はお文の手をひッ張つて、

「お文さんを忘れて何うするものか、忘れぬからこそこの苦勞をして居るのだ」

と云ふ時、側はらなる室の入口を僅かに開きて此有樣をぬすみ見たるは哀れむ可き花枝なり、この室は眞黑闇なれば二人は素より人ある可しとは思ひも殿けざるならん。

「それは嘘を仰しやるんだわ、花枝さんとお約束をなさらぬ中ならば、妾のやうな活智なしほんとにしますけども、もう〳〵すッかり貴君のお心は分つては居ります、妾はもう生きてる甲斐がございませんから、死んでしまいますわ」

「譯を知らないからさう思ひ込むのも無理もないが、これには譯が、まア さ込入つた譯があるのだから、花枝と約束をしたのは無理緣談といふものだ、私は少しも花枝を愛する心は出ない、私の思つてるのは矢張お文さんばかりだよ」

お文は涙を拂ひながら、

「何ンな譯があるのか知りませんけれど、貴君が花枝さんと一緒におなりなすつては、假令貴君がいくら妾を思つて下さらうが、妾に取てそれが何になりますかね」

「まだ一年間があるでは無いか、その中には」

「何うかして下さるお考へですか、いゝへ、それは當になりません、それなら何故今こゝで花枝さんとの縁を切るとは仰しやって下さいません、それをば仰しやらぬ中は妾を思つて下さると云ふ事を、何うして眞實とする事が出來ませう」

此時二人は忽ち室の中に女の咽聲を聞きぬ、お文は思ひ當る處あるかの如くに目眦をつり上げ、荒らかに室の戸口を開きしが、忽ち花枝と顏を合はせぬお文は見る〳〵中に嫉妬の本性を表はして、前の哀れを籠めたる對話には引更へ、郎の前を憚る暇もなく、左も輕蔑したる調子にて、

「貴孃は立聞をして居らつしやいましたれ、貴孃は立ち聞をする事を不德義とは思召さないんですか、さうでせう、人の夫を取る程ですから、立聞位の不德義は何とも思つて居らつしやらぬでせう、ハイいくらでも立聞きなさいな、伯父を取込んで善くも貴孃は純一さんを……あら口惜しい……ですけども、伯父を取込む事は出來ても純一さんの心まで取込事は出來ませんよ、

ハイ、純一さんは末々妾の夫でございます」

穴あらば入りたしとは此時の情なりしならん、純一は殆んど爲す可き術を知らざるが如くつゝ立居りしが、花枝に對して氣の毒の情は禁ぜんと欲して禁ずる能はず、漸やくにお文を制して此方に引分れば、花枝は眞青なる顏を上て悔しげにお文を見やりしが一言も言葉を返さずして純一に向ひ、

「妾は貴君にお話しを致したい事がございます、併しあの方の前ではお話し申す事は出來ません、どうぞ貴君からあの方に」

とお文をば知らぬ人にてもあるかの如くに鷹揚に云ひ出しが、心の中には何事をか決心する處あるが如し。

十

お文はくわッとして、

『それはお斷わり申します、ハイ妾がお斷わり申します』

花枝はお前の返事は聞かぬと云ふ風にて知らぬ顔をしながら、純一の答を待居れば、純一はお文の權幕に兎角の返事も爲し兼居りしが、左りとて花枝の望みを退くる可くもあらねば、

『ハイ何ンな事か伺ひませう』と答へてお文に向ひ『少し遠慮して下さい』

お文は鼻であしらつて、

『花枝さん、何ンな話か知らないが、まだ暫らく此方の對話が有りますから、夫が濟む迄は純一さんをお貸し申す事は出來ません、それ迄貴孃はお居室へ行つてらつしやい、それとも何なら立聞でもなさいまし』

純一は殆んど困却して、

『コレさ、お文さん、少したしなんで貰ひませう、まアいゝからさ、遠慮して下さいと云ふのに』と强く云つて眼にて知らせ、

『少しの間だよ、私に談話があるならばそれから後にして、ほんとに譯のわからない人だ』

お文も流石に爭ひかねて、荒らかに足音立てつゝ彼方に退けり、純一はきまりの惡さと氣の毒さに堪へず花枝を勞はりつゝわが居室に伴なへば、花枝は思ふには違ひて惡びれたる樣もなく、死人にも紛ふ顏色ながら、泣きもせず涙も見せず、純一を見擧げて、

『お話し申したい事と云つて外では有ませんが、妾は只今始めて貴君と妾との約束は全く貴君のお心から出たのでは無く、多分は伯父さんの無理押附であらうと云ふ事を悟りました、お文さんは何か妾が伯父さんを引ッこんでし

た事でもあるやうに仰しやいましたけれど、貴君もまたそのやうにお考へ下すつては誠に迷惑でございます、妾は今夜の事は露程も存知ませず、お増に貴君とお盃をするのだと云はれて、夢のやうになり、後先も考へず貴君と、ハイ妾は貴君を心からお慕ひ申して居りましたから、只嬉しさが先だつて、貴君の思召が何うあらうとも、そのやうな事は深く考へもせず、勿論無理縁談のやうな事ではあるまい、貴君も妾を、あの貴君も妾を一生の妻となさるお心でゐらつしやる事とばかり思ひ込みまして、今更お恥かしうございますけれど、嬉しさが胸一杯で、お盃の席へまゐつたのでございます、其節貴君の御様子に始めて氣がつき、また一言も妾に物を仰しやらず、眞青になつてお出なされたので、妾は何とも譯が解らずにたゞもう悲しくなり自分の室へ歸りましてからは、何ぞこれには譯のある事では無いかと、泣いて許り居りました、その譯は只今漸やく、誠にお文さんの仰せの通り不德

義ではございますけれど、隱れて伺ひましたので、貴君とお文さんとの譯を始めて承知致しました」

とけなげにもこゝまでは涙を見せず、決然たる言葉にて述べ來りたれど、

『妾は全く片思ひにあこがれて居りました、此末假令貴君がお約束をお守り下さらうとも、貴君のお心に妾をお思ひ下さらずば、夫婦の間に何樂しみがございませう、妾はもう〳〵世に浮ぶ事の出來ぬ不幸ものとなり果ました』

と胸中無限の思を說來りせき來る涙とゞめんと欲して止むる能はず差俯むいて咽び入る哀れさ、純一は眞青になり、宛ら石像の如く身搖ぎもせずして腕を拱ぬき居るのみ、花枝は漸やくに涙を拂ひ、

『また斯うと知りましたからは、貴君とお約束を致して居る事は妾の氣が濟みません、妾はもう夢と諦めて、此縁談は斷念致す決心でございます、妾

一人の身をないものとすれば、貴君はお心置きなく、御自分のお好きなお方と御縁組がなされませう妾は決して貴君をお恨みなどは致しません、たとひ貴君は妾をにくいと思召さうとも、貴君の御恩は一生忘れは致しません、妾は貴君にお心置きの殘らぬやう此一身を取計らふ積りでございます、ハイこれだけを申せば妾の氣は濟みましたからこれでお暇申します』

といとも見事に云ひ放して、只呆然たる純一を跡に殘して立去れり、然れどもこれと同時に純一の心には何とも知れぬ一種の恐怖心湧き來れり、そは花枝が死を決したるにはあらずやと云へる一事なり、此考の浮ぶと共に純一は餘事を考ふるの暇もなく、室を出でゝ花枝の跡をつけ行かんとせしに、忽ち物影より我身を遮りとめたるは彼のお文なりゝ

十一

純一は驚ろいて、

『おゝ、お文さんか、貴孃は立聞をして居ましたね』と多少機嫌を損じたる樣子にて云へば、

『ハイ、立聞を致したのが悪うございますか』

『それでも自分で不德義だと云つたぢやないか』

お文は悔しさうに、

『貴君はさうもお心がお異ばりなさいましたか、その立聞を致す迄の苦勞は一通りの事ではございません』

純一は流石に聲を柔しくして、

『分つてるよ、私の心は變ばりはしないよ』と云つて『だがその手を放して下さいつ』と進みぬけんとすれど、お文は一層しかと純一の袂を捕へて、

『いゝへ、いけません、貴君は花枝さんの處へおいでなさるお積りでせう、そ

して御自分はお文を思ひ切つたと花枝さんに仰しやるお積りなんでせう」

『困るなア、そんな事じやアないよ、氣になる事があるのだから』

お文は涙を拭ひながら、

『それ程までに花枝さんの事がお氣にかゝるなら、無理におとめは致しません

けれど妾のやうなものゝ申す事でも、少しはおきゝ遊ばして、兎も角も一寸

お居室へ』

と無理に純一を室の中に引入れぬ、純一は花枝の事が氣がゝりながらも、お文

を押退て見にゆく程の決意もなく、其儘に座をしむれば、お文は純一の膝にも

たれ、白き襟足を見せて潸々と涙ぬ滾し、暫しの間詞も無くてありしが、

郎の心を動せしと思ふ頃涙に美くしさの添ひたる顏をあげ、

『妾は花枝さんに貴君が何と御返事をなさる事かと、ひや〳〵して生きた瀨も

ございませんでしたが、善く御返事をなさらずに居て下さいました、妾はま

ア何んなに嬉しうございましたらう、純一さん、花枝さんはもう諦らめてお

いでなさるのですね。もうすつぱりと貴君の事は斷念すると仰しやつたぢや

ア有ませんか』

純一は只機械的に、

『ウム』

『花枝さんがその氣なら誰に遠慮をする事もないではございませんか』

とお文の心は全く戀に狂へり、純一は嘆息して、

『さう云へばそンなものだけれど、そこが浮世の義理だ』

お文は恨めしげに純一を見上げて、

『花枝さんがその氣であるのに誰に義理がいりますか、そンな事を仰しやるの

はやッぱり花枝さんが可愛くなつたのでございませう』

『馬鹿をお云ひ、私はいつも云ふ通り戀と云ふ事を尚ぶ男だから、滅多にう

つり氣を出しはしないもだけれど、親父が死際の遺言だから、それを反古にするといふ事は何か事情がなければ、斯う云ふとまた疑ぐろだらうけれど、花枝と一緒になりたい氣で云ふのではない、何うかして此縁を破りたいけれど、これには今云ふ通り、事情が無ければ』

お文は云ふに云はれぬ程悲しげに、また腹立しげなる顏をして、

『どンな事情ですか』

『何ンなと云って云ふ譯にはいかぬけれど』

『花枝さんが死でもしなければそンな事情は』

純一は此詞に如何なる感じをなしたるか、顏を青くして思はず身慄ひしぬお文は獨り呟やくやうに、

『あゝ、焦つたくッて仕樣がない、祈り殺してやらうかしら』

お文の胸には一點の情だもなきものゝ如し、純一もその嫉妬心の恐ろしきをば

悟りたるならん。

此時純一の心には又もや花枝の身の上を氣遣ふ心むら〳〵と起り來れるのみか、最早大事に遲れたるが如き心地さへ加はりて、今はお文の前をも顧みる能はざる程となりたれば、花枝の居室に赴むき見んとてッと立上りしが、これと同時に慌立しき足音と共に老女お增は轉げ込が如くに入來りて、

『若旦那樣』

と叫びしまゝ、二の句を矢がすしてそこに泣倒れぬ、純一は胸にひしひしと應へて、聲もあわたゞしく、

『お增、何うしたのだ、花枝さんが何うかしたのでは無いか』

お增は漸やくに顏を擧げて、

『いゝへ、そんな事ではございません、旦那樣が急に、あの息をお引取になりました』

「えッ、親父が」

と純一は又びッくり、その儘病蓐にかけつけたり。

然れども最早純藏の呼吸は無かりき、一家の悲しみは云ふ許りなく、お鶴始め下婢等まゝ皆枕元に泣き沈めるが中に、花枝も雜りて咽び居るを見て、純一は悲しみの中にも云ふ許りなく心を慰めぬ、左れどいとも悲しむ可き第二の凶變が此夜の中に起り來る可しとは夢にも思ひ浮べざる處ならん。

■十二

純藏が息を引取てより二時間程過し後、この一家に又も不幸なる事件起り來りぬ、そは花枝の姿の見えずなりたる一事なり、純一は人より先きに此報を耳にすると共に、人よりも亦一倍胸を轟ろかしつゝ一先づ花枝の居室に駈つけ見しに、主は見えねど落散る一通、純一さま、花枝と記しあり、取上る手も打震

ひつゝ封押切つて讀下せば、

一筆書殘しとゝ思ふ事は先刻申述候間くだ〳〵しくは書記さず女心のいと狹く一たび夫と定めたるあなた樣と添ひ遂られぬ由を知りては最早世に存生ふる甲斐もなくそれさへあるに父とも思ふ伯父さまにさへ死に別れこれもわが身故と思へば一しほ此世の恨めしく死を急ぎて淀川の淵瀬に身を沈めより。

と詞短かに無限の意を籠めて書下せり、純一は又今更に打驚ろき、色を青くして飛で出しが、早速に心づいて、花枝入水の趣を心利たる下男に語り聞せ一刻も猶豫せずして船を出す可し、その船も一般にては心細ければ此邊の漁夫を叩き起し、幾艘にても船を用意さすべしと命じたるまゝ、自分は心も心ならず、門外に走しり出でしが、夕ぐれよりの風は猶ほ未だ止まず、川上に逆らつて吹き立つれば波は怒りて打返し白く泡立ちつゝ、夜の目にはいと物

凄く、行きかふ船だに絶えたり、純一は此の有様にいたく失望しつゝ、何れの方をあさらんかと、暫し躊躇居りしが、川下には身を投ぐ可き淵なきに心づき足を母音寺の方に向たり、空は一面に薄雲にて蔽はれたれど、月あるほどの頃なれば、四邊は左までは闇からず、物の黒白は尙分つ可し、左れど純一は何の爲にあさり行けるか、花枝はまだ身を投げである可しと思へるか、思ふに純一は素より深き思慮を爲すの暇もなく、只手がゝりを得る事もやの一念がわが身を追ひ立てゝるならん、然るに純一の捜索は全く無効にあらずして未だ二町と行かぬ中に、たしかに女の履物を見當たり、純一は胸を躍らして手に取上げ見れば、あはれ紛ふ方もなき花枝の塗下駄にして、床しと云へる藤紫の緒をすげたり。

「こゝだッ」

と思はず叫びて、純一は水の面を見渡せしが、こゝにも波は荒くして岸の亂杭

を打つ音、宛ら美人の犧牲を得て舌鼓を打てるが如し、無念と見下す水の面、どんよりと黑すみ渡り、亂杭にせかれてこゝに彼處に大なる渦を卷つゝ、合しては一ッとなり、散ては數添へ、其の中にあはれなる花枝をさいなみつゝあるにも似たり、そも花枝は幾時間それとも幾分の前に身を沈めたるか、今は川の面にそれかと思ふものも浮び居られば、その身はこの川底にある可しや、はた川下に流れゆきたるやそれさへも覺束なし、純一は絶望の嘆聲を發して、

「あゝ、親父に濟まぬ、みんな己の咎だ、併し、これ程の無分別を仕やうとはあゝ情けない、死なれば妻に、いや正當の妻だ、己の妻は花枝の外には無い、その中には屹度心から愛するやうになるのであつたらう、又お文には氣の毒だけれど、その方は諦らめなければならぬのだ、死んだ親父の遺言をどうして反く事が出來やう」

純一は直ちに取つて返せしが、此時數艘の船は既に其準備を整へて、今

や漕ぎ出んとする處なれば直に其一隻に飛乘り、入水の場處を語り聞かせ、夫々手分をなして大捜索を始めたり、左れど、時既に後れたるか、その上風は強し、波は荒し、船をあやつるも心のまゝならず、花枝の姿は遂に其水上にも、川下にも見當らざりき、殆んど天明がたまで漕ぎ求めたれども遂に何の効も無かりき。

純一は獨りわが居室に籠りて無限の感慨に打たるゝのみ、父の死と云ひ花枝の入水と云ひ重なる凶變に鐵腸の男子も身は宛らに搔むしらるゝの思ひあり殊に父が遺愛の花枝に對し、その一生を護らんと誓ひたる、言の葉さへも乾かぬに、わが身故の入水をさせし事、自ら手を下せしに異ならず、彼を思ひ此を懷へば心は愈々亂れて厮のごとく、われを睨む恐ろしき父の面影、薄命を繼ふる美はしき花枝の姿、交るゝ胸に浮び來りて心苦しき事云はん方もなし斯る處にお文はまた純一を慕ふて入り來れり。

十三

純一はお文と顏を合す心もなく、たゞ萎れ返つて俯むき居りしが、お文は遠慮なくその前に座りて、

『純一さん、花枝さんの身体はまだ上りませんとれ』

といふ言葉には少しも悲しみの語氣を帶びず、純一は多少その無感覺なるに驚きし容子にて、お文の顏を見詰め、

『貴孃は花枝の死んだ事を何とも思つては、居ないのですか』

『いゝへ、何とも思はぬ處で、有ません、夜前貴君が仰しやつた通り、誠にいゝ事情が出來たと思つて居ります、妾はこンな事情がこのやうに早く湧いて來やうとも夢にも思ひませんでした、最早貴君と妾の間には邪魔になるものも有りません』

純一は此言葉を聞いて殆んど恐怖の色を爲し、かくの如く恐ろしき詞が、如何にして虫も殺さぬやうなお文の唇より漏れ出るかと驚ろけり、お文の心は石か木か、嫉妬にはその本性を失ふ習ひ、とは云ひながら、お文の如きは寧ろその本性が現はしたるものならん、純一は詞を鋭くして、

「お文さん、それでも貴嬢は花枝の死んだのを喜んで居るのだね」

「ハイ、喜んで居ります、貴君は喜んではおいでなさらぬのですか」

純一は益々驚ろきて、

「私しは喜ぶ處では有りません、この悲しみは恐らく一生忘れる事が出來ますまい」

と詞を叮嚀に語氣を強く云ふ、先程よりの素振といひ、またかゝる荒らかなる詞をお文にかけたるは、これ迄に無き事なれば、こは全く花枝を愛するに至りしが故ならんと、お文は心に邪推し、涙ぐんで悔しげに、

「そんな事を仰しやるからは貴君は花枝さんを可愛がつて妾を捨る氣におなりなすつたのでせう、夫ならば猶更花枝さんの死んだのを喜びますわ」

「花枝を愛する愛さぬは兎に角として、他人が死んだのでも悲しむのが人情ではありませんか、まして親父が孫も同然に可愛がつて居つた花枝を、私故に殺して仕舞つては、何うして死んだ親父に言譯が出來ますか、此點を考へても花枝の死を喜ぶなどゝ云ふ無慈悲な詞が夢にも出されるものではない」

見下はてた女だと云ふ顔にて諭すが如くに云へば、お文は只無神經にそれを聞流して、

「それなら貴君は妾を元の通りに思つて居つて下さいますか、きつぱりと此處で仰しやつて下さいまし」

戀はかゝる强談に似たる事にて整ふ可きか、好しや純一が心を捧げてお文を愛し居るとするも、心悲嘆に亂れて餘事を思ふの暇なき際に、斯る事を云ひ出る

は其時期を誤れり、そも純一は之に何と答ふ可きか。

戀といひ情愛と云ふも、たゞ一つの同情に過ぎず、喜びにつけ悲しみにつけ人はわが身に同情を表するものに向つて、また同じく同情を表するなり喜び悲しみを共にしてこそ互に相愛すれ、同情なければ戀もなく愛もなし、さればわが悲みを悲みとせず、却つて之を喜びとするものに向つては、直に嫌惡の情を生ずるほ人情の自然にして怪むに足らず、その衝突の大なるものに至つては、終生敵同士となりて睨み合ふもある可し、この點に於て純一とお文との間には一大衝突を來せり、また一方より云へば、純一はこれ迄お文の善き側のみを見て、惡しき側を知らず、お文もまた其本性の嫉妬を表はすの折も無りし故に、殊に從兄弟どしとは云へ、物心つきてよりは、多く東西に隔たり居たれば、詳しくは純一もお文の性質を確むる能はず、たゞ偶々相遇ふ毎にその美くしき姿、はた我を慕ふ情に絆されて、互に相許す迄に至りたるも

のなりしに、今はその半面の惡しき側を知るを得て、かゝる女と一生を共にせば、如何に恐ろしき事ならんと云へる考へは、忽ち胸に起り來れり、戀程不確實なるものは無し、僅の事より成立てども、一たび嫌惡の情を生じては驚ろく可き程の度を以て冷やかになり行く可し、純一の胸にお文を慕ふの心は今や煙りの如く消去れり、嗚呼如何にしてお文の間に答へ得可き、左りとて情なく之を拒絶せん事は情に於て忍びざる處あれば、只詞を曖昧にして、

『お文さん、私の心は今は悲しみが一ぱいでそんな事を考へて居る暇がない決して邪推を廻はすのではないよ、親父の死んだ許であるのに、このやうな事を相談するには忍びない』。

十四

花枝が入水せしとて野崎一家が騒き立ちしより、十分程以前に、網島の邊よ

り小舟を操つり、櫻之宮の上手を指して、風を凌ぎつゝ漕ぎ上れる一人の男あり、手拭に顔を包みたれば善くはわかられど、このあたりの漁夫とは見えず其風体より察すればいづれ眞直な世渡はせぬ無賴漢ならん、空模樣を眺めながら、

『落さうになつて來やがつたな、面白くもれへ、こンナ日にやア得て無間を取る奴さ、糞いまゝしい、ほい、此風は何うしたものだ、梶が取れれへや、どツこいしよ、それ重梶ッ、うむいけれへ、南無阿彌陀佛、長拇の吉樣を何うして吳れる』

扨てはこの曲者先の夜花枝を捕へんとしたる長拇の吉と見えたり。

長拇の吉は漸やくに都島の邊まで遡りしが、折しも眼に入る野崎純藏の家構へを一瞥して、

『此間程無間を取つた事はれへが、虫の有る男だぜ、今に覺えて居ろ、己が跡からつけて來てこゝの娘と睨みなつけたからは何うせ一度は物にせずにやア置れへや』と呟やきつゝ、猶も櫓を操つて眼先に波に漂よふ婦人の屍体、

『人を驚ろかせあがる、何だ、土左か、面白くもれへ』

と其儘に捨ゆかんとして、

『夜目にやア判られへけども、萬更の服裝でもなさゝうだ、どれひン剝て吳やうか、おつと御免なせへか、お召物を頂きますぜ』

と屍体を引寄せて船に上しが、其顔を眺めて喫驚、

『やッ、こりや野崎の娘だ』

左なり、こは慥かに哀れなる花枝の屍体なり。

『何うしたものだ、身投とは情ないぞ、己の仕事も水の泡か』

と吉は落膽して又つく〴〵と花枝の死顔を眺め、

『ても美くしい女をむざ〳〵と、も少し己が早けりやア殺す處じや無へものを

なア、いや待てよ、まだ蘇生られへものでもあるめい、水もそんなにやア呑んで居れいやうだ、どれ伯母の宅で介抱と出掛やうか、蘇生つたら一狂言が出來るぞ」

吉は程なく舟を長拐の片傍に着け、花枝の屍体を小脇に抱へて、草叢を押分け、怪しげなる艸の家の戸を打叩けり。

「伯母御、伯母御、開けて呉れ、お頼ん申すぜ」

中よりは皺枯たる女の聲、

「おい騒動しいのは誰だへ、少し靜かにして貰ひませう」

「己だ己だ、私だ、伯母御、吉だよ、ぐづ〳〵云はずと、開けておくンなせい大急ぎだ」

「吉かへ、慌たゞしい此夜更になつて何の用か知らないが、餘り人を馬鹿にしなさんな、何度呼んでもこつちの用にやア顔出もしれいで、手前の用と云と

いて伯母を便つて來やがる、今夜も大方賭場で裸体にされたのだらう」

「困るなア、伯母御、そんな事じやれへよ儲け口だ」

この詞を聞いて中の女は急に聲を變へ、

「えッ、儲け口だ」

「儲け口も儲け口、どッしりお禮はするよ」

「今開るよおや手ランプは何處へ行つた、マッチが見えねえ、えゝ焦つてい」

慾に目の無きその名もお鳥と云ふ熊鷹老婆、手燭を點して戸口を開き、

「全体何ンな儲け口だへ」

と四邊を憚る調子にて、吉を見下せしが小脇に抱へたる女の屍体を見て興覺顔

「おい〳〵吉、そりやア何だへ」

吉は屍体を椽に下して、

「是が手品の種なんだ」お鳥は呆れた顔をして、

「死人が種になるかへ」

「だから生して貰ひていんだ、こりやアお土左だ、さア手傳つて水を吐かして吳ンれえ」

「生返つてから何うするのだへ、それを先へ聞いて置かうか」

「くどいなア、この女ア　都島の野崎の娘だぜ、生返らした許りでも百と二百のものにやアならア、お大家のお孃樣だ、そのお孃樣が身投をするからにやア、また何ぞ込入つた譯が有るにきまつてらア、狂言の種にならうと云ふなア、そこだ五六日の中にやア己が屹度探り出して見せる、いゝか、その間は籠の鳥だ、隨分大事にかけて貰はうぜ、解つたか」お鳥は大合點にて、

「あゝ、わからなくツて何うするものか、何かの相談は跡として、早く療治にかゝらなけりやアとッ返しがつかなくなりやア仕ねへか」

花枝は水は餘り呑み居らず飛込たる際亂杭に打たれたる跡乳の下にあり、伯母甥同士は花枝を抱いて水を吐かせるやら、藁火にあてるやら、慾故にこそ介抱至らぬ隈も無りしに、花枝は漸やくに息を吹返せり、左れど只僅かに眼を睜きしのみにて、眠るが如く眼を閉ぢたり、打傷に惱める故ならん、お鳥は飛上る程に喜び、

「さア、もう大丈夫だよ」

「朝まで寢かして置いたらこッちのものにならア、確かり賴むぜ」

十五

新町大濕習會の見物席に差向ひで物語り居るは、山田亮吉とて近頃網島に開業したる大學出身の若醫士と其母のお勝となり、今は丁度幕あひと覺しく、お勝は亮吉に向ひて、

「妾は老人の癖に斯うして踊りだのおさらへを見るのが大好だから、今日は

またお前に連られて來てよい樂しみをします』

『貴母は本年は京都の都踊りも鴨川踊りも御覽なさいましたが如何でございました、彼地はまた斯ふ云ふものゝ本場ですから』

『處がお前、さうでないよ、本年などは只混雜する許りで仕樣がないよ、そして南地の芦邊踊はまだ見に行かぬが、この新町は目先の變つた事をするといふ評判で打出しの西洋踊とか舞蹈とやらが面白いと云ふでは無いか、お前は此間誰やらに誘はれて一度見たとお云ひだつたれ』

『途中で歸つて仕舞つたのでその西洋踊りは見ませんでしたが、全体新町の趣向は此搦物にもある通り山海里と云ふ趣向で、最初が東山の踊りに次が水族館の因みで一寸したものを見せるんですが餘り感心もしませんよ』

兩人が語り合ふ中軈て幕開となり、布團着て寢たる姿や東山と云ふ唄ひ出しにて、六人の美女舞臺に現はれ、同じ揃の花笠を頭に戴き、緋縮緬の襦袢

のぬぎかけと云ふ姿にて踊りそめたり、お勝は左も樂しげに見とれつゝ、

『れへ、亮吉、大層奇麗に舞では無か、蝶をあしらつて戯むれになる處などは花やかで、それに京女郎の優しい處を見せて大層いゝでは無か』

『東山の全景を遠見にして大極殿を見せるなどは例の博覽會を當込だらうけれど大阪の舞臺に東山も餘り感心しないぢや有ませんか、今年などは日清戰爭で大捷利を得た因もあり、旁々皇國第一と云ふ富士を利用したなら何な者でせうか、さうさ富士のまき狩でもあるまいし、まア業平の東下りと云奴にでもしたら善らうと思ひますよ』

『それもさうされ、東下りの方が善かも知ないれ』

『お母さん次の幕が水族館と云ふので龍宮の乙姫を見せるんですがれ、これは悪い事もないが、少しあツけないやうな氣がするから何か斯う道具をひツくり返して一寸ひれつたものを見せると云ふ工夫にしたら善からうと思ひま

すよ、尤も始めは岩船をやる趣向であつたとか云ふ事を聞ましたが、なぜそれを止して仕舞たかしら、尤も岩船を本形でやらうと云ふにやア一寸踊子が無かも知れんが、また皮肉な處が愛嬌になるものさ、それに岩船は佳吉に縁故のある能だから、意味の無い龍宮よりは萬萬ですよ」

二人は語りつ評しつある間に水族館の舞ひも濟み見物と云へる大切の西洋舞蹈に移りたり、お勝は少し呆氣に取られた風にて眺め居れば、亮吉はまた獨り悦に入ながら、

「是は妙だ、不思議だ、活潑だ、洋服も洋服だが、舞蹈に帽を被つてるなぞは愛嬌だ」

「總踊りで大層賑やかで面白いけれど、妾などには舞ふのか跳るのかわからない」

「いやそこが呼物なんでせうよ、併し美人の拔撰と云ふ處に價値があるのかも知れませんれ、ハツハツ」

お勝は煙にまかれたと云ふ樣子にて、

何しろ大層目先の變つたものだれ」

とは間違のなき適評なんめり。

十六

亮吉が母を新町に伴なひゆきたる夜、闇は綾なき櫻の宮の上手より、櫓の音のみを川水を傳へて漕ぎ下る一艘の小舟あり、舟は艫て網島の濱岸に着きしが上り來る男を誰ぞと見れば、彼の惡漢長柄の吉なりけり、今夜は顔をも包み居られば、衣類も餘り見苦しからぬを纏ひ、尻からげをなしたれど股引を穿ち見渡す所先づ職人風とは見ゆ可し、夜は更たり、このわたりに行かふ人もなく、四邊は眞の闇路を辿りて、吉は醫士山田亮吉方の前に出でしに潛戸はまだ

開き居たり、吉はつと其中に進み入りて玄關より聲をかけ、

「お賴ン申します」

二度三度訪なへば、漸やくに眠氣なる眼を擦りつゝ出來りし書生膨れ顏に

「何だへ」吉は殊勝らしく揉手をして、

「急病人が出來ましたので先生に御診察を願ひたいので」

「ウム、折角だけれどもな、先生は今夜留守でまだお歸りが無いられ、明日の朝にしては何うだ」

「明日の朝に延せるなら此夜更にお願ひにや參りやせん、是非とも先生にお願ひ申したいので」

「困るなア先生は留守だといふに、僕が代診に出掛けても善いけれど、少しその何でな」

「それなら先生のお出先へ、私がお迎ひにいつて參りやせう」

中中動きさうも無き樣子に書生は困却しながら、

「何處といつて南地だから迎ひにいく中にや夜がやけて急病人の間に合ふまいぜ、併しもう十二時だからおつツけお歸りになる刻限だ、ウムあの車がそうかも知んぞ」

と云ひ居る中二輛の車は勇しく門前に留まりしが程なく亮吉は母を助けて入り來れり、書生は早速亮吉に向ひ、右の趣きを語れば亮吉は頷づきて、

「よし〳〵、急病人とあれば見てあげやう」吉は喜びながら、

「少々田舍で、この上の方なんで、舟でお迎ひにめいりやしたから、何ぞそれにお乘ンなすつて下せいまし、直そこに繫いで有ます」

亮吉は何心なく舟に乘移れば、吉は勇ましく櫓を押して眞一文字に川を遡れり、

「おい、上の方と許りではわからぬが何と云ふ處だへ」

『なに、川崎村です』

左れどはや川崎村のあたりも櫻島のあたりも過ぎ去りたり、亮吉は心稍穩やかならぬ感じを生じ、

『川崎村はコンなに遠いか』と問返せば、

『へい』

と生返事をしてひたすら押しに櫓を押しぬ、亮吉は醫士の一生には必らず一二度は怪しむ可き事及恐る可き事に出遭ふ事ありとの語り草を想ひ起こし、今夜も亦何か恐る可き事若しくは怪しむ可き事に出遭ふにはあらずやなど思ひ浮べつゝ、半ば恐れを抱きて殆んど舟に乘りしを悔ひしも今は及ばず、兎角する中舟はトある草叢に着られしが、四邊は闇くしてこゝを何處とわく可からず吉は亮吉を助けて舟より下し、

『すぐそこですから歩いて下せい、病人は私の妹ですがね、怪我をしやがつて、それから熱になつた樣子でげすが今夜はまた急に容子が惡くなりやしたので難苦しい處でげすがまアお出でなすつて下せい』

亮吉は無言の儘吉に從へば程なく茅屋の中へ導かれたり。

『おゝ、善くお出下さいました』と出で迎ふはかのお鳥『早速病人を』

と次の室に誘ひたり、亮吉げ汚れたる布團の上に打伏し居る醜くげなる田舍娘を心に畫きつゝ打通りたるに、こはそも如何に、布團の左まで見苦しからぬは兎も角、その中に伏し居る娘は、亮吉が心に畫きしものとは雲泥の相違にして美しく、品よく、如何なる高貴の令孃と云ふも、恥かしからぬ顏立と見られたるが上に、身に纏へるものさへ柔らかき絹物なりけり、亮吉の胸には怪訝の念忽ちに湧上りて、驚愕の色はその顏に表はれたり、お鳥は斯くと見て取るや否や、

『小さい時から南地へ出して置いた娘ですが、二三日以前怪我から乳の下を打

ちましたのが障つたと見えまして、へゝ申すもお恥しうございますけれど、この娘は生命の綱でございますので、心配でなりません』

と云ふ亮吉は出て居る娘の風にあらずと益す怪しみながらも、左あらぬ樣子を粧ひ、無言の儘にて病人の診察に取かゝれり、この病人は云ふ迄も無く花枝なれどいたく衰弱し居れるのみか、熱病に變じたるものと見え、殆んど生体もなきものゝ如し、亮吉は充分に診察を試みしが、いたく其美に打れ、之と共に病人は決してお鳥の子にあらずして、何れよりか誘拐し來りたる娘にはあらずやと思はれ、病人に對する同情はむらむらとして湧き來れり、左れど斯る素振は露程も見せず、心靜かに診察を終りて、お鳥に向ひ、

『名は何と云ひますか』と何げなく問出でしに、お鳥は吉と顏を見合しながら

『ハイ名は』と逡巡て『その名は、えゝ、鳥と申ます』

と自分の名を答へたり。

十七

亮吉はその不似合なる名に驚ろくかの如く、

『お鳥さん』と不思議さうな顏をせしが、また思ひ返して鹿爪らしく、

『いや、なに心配には及びません、三四日たてば目に見えて善くなります』

お鳥は追從笑ひをしながら、

『何うもお蔭樣で有がたうございます、何うぞお藥りを四五日分頂戴致します』

亮吉は妙な顏をしてお鳥を眺め、

『四五日分、この病人は明日も診察を仕なけりやァ不可よ』

『いや、遠方の處それにや及びやせん、なァお母ァ』

と吉はお鳥に目配して云ふ、お鳥は承知してると云ふ顏にて、

『また惡くなつた時はお迎ひを差上ますから、それ迄の處四五日分のお藥りを亮吉は尙一度この病人を診察したしとの心山々なれど、强ひてとも云ひ兼ね

『それなら仕樣がない、三日分程あげても善いが、併し明日も一度見なけりやア、藥の加減も有し、病氣が何う變るまいものでもない』

とほのめかせども吉お鳥も冷やかに聞流して何とも受應せず、

『それ、吉、お送り申して藥を頂戴して來い』

とお鳥は亮吉の病人に名殘惜しげなる容子を見て、早く立去れがしに云ふ、

『それなら先生お送り申します』

亮吉は何となく心殘れど、扨ある可きにあられば立上つて吉に導かれ、また亮吉が怪しき事若くは恐るべき事に出遭ふにはあらずやと思ひ浮べたる空想は遂に事實となれり、亮吉は猶送られて歸る船の中に於て獨り樣々の感慨に沈み

も前の小船に乘移れば、下り故に船は矢の如く流れに從ひぬ。

ぬ、如何にするも彼の美しく氣高き病人が、心樣正しとも見ぬかの女主人の種なりとは思はれず、お鳥と云ふ名さへも疑はしく、南地に出し居りたりと云ふは尙々疑はし、思ふに彼病人こそ惡漢惡婦の罠に陷いり居るものにはあらずや、されば亮吉を救ひ出すは醫師たるものゝ任俠にはあらずや、たゞ病より人を救ふが醫師の職のみかは、左れど如何にして之を救ひ出す可き彼の茅屋は闇に何れの處としもわく由なし、川崎村と云ひたれど、そは詐はりなり、殊に大阪馴れぬわが身には只今宵のみにて何れをあてに尋ね出さんなど、血氣にはやる心とその好奇心とは亮吉をして此事件に深入せしめんとせり亮吉は又小說的理想より、已れは一見直ちに彼の病人と戀に落ちたるにはあらずやと自ら疑へり、若し亮吉にして果して花枝を戀ひたりとせば、そは花枝の美くしきに基くと云ふよりも、夢ろこの小說的理感に基くと云ふ方適當ならん、そは兎も角も此夜診察したる時の花枝の姿は、亮吉の一生忘るゝ能

はざる所なりしといふ。

亮吉の事は暫らく置き茲に純一の上を記さん、世に戀程冷熱の甚しきは無し純一はお文に一點の情だもなく、その嫉妬心の盛なるを悟るや、之を恐れ之を忌むの情は、前に之を慕ひしだけそれだけ甚しく、今はお文と顏を合はすも厭はしく、一向お文を避けて多くはわが居室にのみ閉籠れり、お文を嫌ふと共に彌々心に浮び來るは花枝の姿なり、死んだ子は見目善しとの諺ならねど、其美くしさは云はずもあれ、花枝が一擧一動を思ふに、お文の如くいかつげならず、左りとて卑屈なる跡もなく、物ごし閑雅にして婀娜めかず、言葉溫柔に思ひ遣りて、優にやさしき女子の情を備へたり、己は何故にこの美質に心つかざりしや、心つきしも何故にいぶせきものと思ひたるか、今更思ふも詮なき事ながら、あれまでによそ〳〵しくせざりしならんには、また何とか慰むる言葉有しならんには、あつたら身投はさせまじきものを、など悔む心

の出づるにつけては、今まで影だも表はさゞりし怪しき心は自から湧來れり

こは云ふ迄もなく花枝を戀ふる心なり、斯る心の湧出ると共に麗には恐ろしきやうに聞かれたる花枝が訣別の言葉は今や天女の私語の如くに追思せらるゝなり「妾は全く片思ひにあこがれて居りました、此末假令貴君がお約束をお守り下さらうとも、貴君のお心に妾をお思ひ下さらずば、夫婦の間に何樂しみがございませう、妾はもう〳〵世に浮ぶ事の出來ぬ不幸ものとなり果ました、花枝が最後の此言葉を思ふ毎に純一の腸は幾度か斷れんとす純一は最早此苦しみに堪へず、如何にもして花枝を忘るゝ工夫を爲さんとの念より、父の喪のすみ次第直に歐洲に渡航せんと思ひ立ちたり。

十八

一室の中に差向ひて、座を占め居るは純一と叔母のお鶴となり、お鶴は腕を拱

ぬきて俯むき居る純一をじッと見やり、

『だッてお前の量見がわからぬでは無いか、何も洋行するなでは無い、けれど お前が彼地へ行っては跡の家事も困る、それはまア善いとしても歸ってから 何する積だへ』

『歸つて來ても矢張獨身で暮します』

『馬鹿をおいひ、男が一生獨身で暮されるとお思ひか』

『ハイ私程の決心が有れば』

『決心は決心、そりや獨身で暮されもしやう、併し、純一、それでは先祖の位牌へ對しても濟むまいが、お前ッきりで野崎の血統は斷絶して仕舞ふでは無いが、それとも血統を絶しても自分一人の我儘氣儘を通すといふのかへ』

此言葉はいたく純一の胸にこたへしと見え、色を青くして一語も出ず、お鶴は疊みかけて、

『獨身で暮すと云ふのは自分一人のわが儘、そのわが儘の爲めに先祖代々の家柄潰しで仕舞つても差構ひは無いとお思ひか』

純一は大に窮して、

『兎も角も三年だけは獨身で暮しますそれから後は後の考へとして、それ迄は斷然獨身を守ります』と弱音を云ふ、

『それなら三年たてばお文を嫁にするとお云ひか』

一ッ逃れて又た一ッ、純一はます〳〵迷惑して、

『三年先きのことを今から約束は出來ませんよ』

『お前も男らしくないではないか、お文と一緒になれぬならなれぬとお云ひ』

と強く云つて又た心配らしく、

『併しすこしはお文や妾の心も察しておくれ、あれ程にお前を慕つて居るものを、お前に見捨られてはそりやア身投をする位ぬでは無いよ、純一、お前

の心一ツで妾の浮ぶ瀬がなくなるのだよ」

純一は決斷の無きと云ふ程の男にはあられぬ情に脆き實ゆゑ、泣言を云はれては斷然と排斥する程の勇氣もなく、叔母さん、「私や親父の死んだのや何もで、嫁を貰ふなどゝ云考は少しも胸に浮びませんがれ、も少し氣が沈着てからの相談にして下さいな、その上で何とかきつぱり御返事をしますから」

ぐづぐづして居る間には何うにかなるだらうのだらう主義と見えたり。

『何そと云ふとも少しまつてくれとお云ひだが、お前も此間まではお文と善い中であつたでは無いかへ、何が氣にいらなくなつたのか知らないけれど、花枝さんは死んでしまつたし、お父さんの遺言に反くと云ふ事もあるまい、世間ではお文とお前との事をとうから知つて居つて、彼是云つてるさうだから、今お前に見離されて御覽、お文を緣づけやうとしてもあれは疵物だと云つて相手にはしない、お前はそれでもお文を不憫とは思つてお吳れで無いか

へ、何うなつても人の事は構はぬといふ了見かへ」

叔母の切先は益々鋭し、純一は受太刀になつて、

『いゝへ、決してそんな心では有ません』

自分に弱味があれば辯解も出來ず、叔母はつけ入つて、

「それでは何うしてお吳れだへ」

『婚姻は一生の大事ですからも少しお待下すつて、充分に思案をして見ますから』と隨分窮したる云拔かな、畢竟お鶴は要領を得ずして室を立去れり。

花枝の入水はお文の爲めに幸か不幸か、戀の邪魔を除き得たれば最早世に憂ふるものは無しと、喜び勇みたるに引變へて、純一とお文との間には却つて大なる隔てを作るに至りたり、お文の悔しさ悲しさは云ふ許りなけれど、たゞ此世になきものとなりたるがせめてもの思ひやりにて、今こそ純一はわが身に隔つれ、去るものは日に疎しの諺通り、時を經るに從ひ花枝を忘るゝに至る可

く、その間に此身より純一の心を取込むの策を巡らしなばよし今われに疎くとも元の愛を呼返すに難からじ、さらば氣永に純一を擒せんとて、悔しき心を色にも見せず、出來る丈の親切を純一に盡さんと決心したり、純一の洋行を思ひ立ちたる事は未だ知らぬなりけり。

ある夕べ、お文は只一人門を出でゝ堤の邊を座ろ歩るきなし居たるに、わか後より、

『お嬢さん』

と呼ぶものあり、お文は誰ならんと振顧みしに怪しげなる風体の男突立居れり、お文は氣味わるさに何とも返事せず、つと其前を通りぬけんとせしが、男は早くも其袂を捕へて、

『お嬢さん、お待なせい、私やア大事の用を頼まれて來たのだ』

『お前のやうなものに用事はないよ、そこお放し』

『處が大有りだから不思議さ、併し聞かれへと仰しやりやアそれ迄だが、私やア花枝さんから使を頼まれて來やしたかられ』此一語先つお文の膽を奪へり

■十九

花枝は未だ此世に存生居るか否々、行かふ舟だも途絶たる暴風の夜に身投したる事なれば、萬に一ツも助けらる可筈なし、左れど若し意外に花枝が助けられて今尚存生居れりとせば、これお文に取つては此上なき一大事なり、左ればお文は花枝の存生を信ぜざれども、花枝よりの使ひと云へる一語には膽を潰さゞるを得ず、恐れをなして男の顏を見詰め、

『全体お前は何だと、花枝さんから使だなどゝ人を嚇して、花枝さんは死んで此世に居はしないよ』と強く云へば、

『私かへ、私や長柄の吉と云ふ肩書附の野郎さ、何もお前さんを嚇しに來や

しれへ、花枝さんが助かつて生て居なさるから、それをお知らせ申しに參りやしたのさ」

お文は色を變へて、

「えッ、花枝さんが助かつて生て居る、何處に居るのだへ、さア早く知らしてお吳れ」

「おッとさうはいかれえ、私やお前さんにお話し申さうと思つて、此の二三日は毎晩此邊を徘徊てお前さんの見えるのを待つて居るのだ」

「だからお話しと云ふのに」

「お孃さん、お前さんも察しの悪いお方だ、私や肩書附の悪黨ですぜ、態々お前さんにお知らせ申さうと云ふにやア何か腹が無けりゃ、れへ、お孃さんそんなものぢやございませんか」

お文は驚ろいて吉の顏を眺め、

「そりやお金くらゐは進やうけれど、態々妾に知らせやうと云ふお前の氣が知れないぢやないか」

と何氣なく紛らして云へば、吉は鼻先で嘲笑ひながら眼を光らして、

「何方の氣が知れれへか、餘り入を安く見ては貰ひますめへぜ、併しお孃さんそう仰しやりやそれ迄だ、私ぢ今ッからお宅へ行つて若旦那にお知らせ申しやせうよ」

お文は眞青になりて、吉のわが秘密を握りわが心情を見拔けるが如きに驚ろきながら、

「わかつたよ、妾が悪かつたよ、若旦那には妾から知らせるから、誰にも云ないでお吳れ」

「云ふなならば云ひますめへ、だがお孃さん、私や最早すッかりとお前さんの内幕を知つて居ますぜ、併し何もこゝでほじくり出て丼べ立やうじやアれへ、

そこは云ぬが花と云奴さ、れへわかりやしたか、處でお前さんに相談がある
が一寸下へおりて貰ひやせうか」
とお文の返事するをも待ず、堤を下て川岸に行けり、お文は素より之を拒絶す
るの勇氣なく、否應なしにその後に從ひぬ、如何なる事を云はるゝかと、心も
心ならず、われ知らず打震ひ居れば、吉は冷やかにお文を見やりて、
「花枝さんを助けたのは外でもれへ、私だ、お聞なせい、斯う云ふ譯さ」
と花枝を助けて伯母の家に閉籠め置ける次第を語り、
「もし、お孃さん、相談と云ふなアこれでげすがれ、花枝さんは生すも殺すも
私の手の中だ、こゝはお前さんの心一ッ私や何うなりとお心任せに致し
ますぜ、何も相談次第さ、お孃さん默つてゝは解られへや、お前さんが殺す
のではれへ、そんなにびくゞしなさんな、なにそれならお前さんの口から
殺して呉と仰しやるにも及ばれへ、そこは相談一ッで以心傳心と云ふ奴さ

五本だけお出しなさろが、さうすりや私が獨りで仕事をして見せやす」
お文は震ひながら、
「五十圓かへ」
「お孃さん、冗談云つちやア困らア、それなら何もこンな險呑な眞似をしやア
しれへぜ」
「それじやア五百圓かへ」
「まアそんなものされ」
「でもそんなお金は」
「都島の野崎さんとも云はるゝ大家のお孃さまだ、五百圓許の金はこちと
らの五圓か十圓さ、そのダーヤモンドとやらの指輪一ッでも百と二百の代
物じや有ませんかへ」と云つて獨語のやうに、
「若旦那に知らせても百と二百のものにやならア、金は少なくッてもその方が

心配なしで善いかも知れへ、こッちやアまさか間違へばがん首がなくなる仕事だからなア」と呟やき、更にお文に向つて、

「お嬢さん、早く返事をしておくんなせいな、五百圓を一度にお貰ひ申すにも及ばれへ、ちよつちよつと少しづゝ御都合の出來る時で善うがすぜ」

お文は齒の根を震はしながら、

「それでは五百圓あげよう」。

■二十

お鳥が住家とせる淀川岸の茅屋を闇に尋ね寄る長柄の吉、

「伯母御・伯母御」と忍びやかに訪なへば應と答へて出で來るお鳥、

「吉か首尾は何うだへ」

「上々吉さ、喜んでくンれへ、これだけで談をきめて來た」

と五本の指を出して、

「こりや手附だぜ」

と兌換券二十枚許を並ぶれば、お鳥は早や眼の色を變へて、

「へッへッ久し振りで甘い汁が吸へる、吉、談をきめて來たと云ふなア、何うきめて來たのだへ」

「何うと云つてかたづけて仕舞ふ約束さ」

「それではお前、殺す積りか」と少し呆れた樣子にて云へば、吉は沈着た顏をして、

「なアに、殺したとごまかす積りさ、高がお相手はお孃樣だ、何んとでも欺せらア」お鳥は安心して、

「そうとも、殺して仕舞つちやア玉なしだ、二度の狂言が書けなくならアな」

吉は默頭て、

『處ろで何うだへ、容子は』

『病人かへ、大きにいゝよ、何にも知れへから、世話になるのを氣の毒がつて居らアな』

『さうか、そればさうと伯母御、この話がついたからは、前祝ひに一杯やらうじやねへか、御苦勞だけれど何か見つくろつて來て吳ゝれへな』

『あゝ、さうされ、前祝ひとは思ひ附だ、遠方まで行かなけりや何にもれへけれど何れ一走りいつて來やうか』

『氣の毒だなア』

一圓札を摑んでその儘出行くお鳥の後姿を見送り、吉はにたりと笑つて、

『と先づ追拂つて置いて鬼のお留守に一寸も早く、何れ人間は兎角慾と色の事だ』

と花枝を寢せ置ける奥の間に赴むけば、花枝は最早快復に近づきたる容子にて、床の上に坐りつゝ、悲しき事を思ひ浮てべ涙を拭ひつゝありしが、入り來る人ありと見て物憂げに擡げたるその面ざし、青ざめたる頰に少し赤みを帶て束ね上たる鬢の毛の幾筋となくこぼれ懸れる、凄き迄に美くし、吉は思はず見とれて顏の崩るゝをも知ず、その儘べたりと坐りて、

『へゝ、お孃さん、大分お顏の色が善くなりやしたれ、その美くしさは何とも云へたもンぢや有ませんぜ』

花枝は氣味わるさに何とも答へず、只吉の顏を見詰むれば、

『お孃さん、私や決して怪しいゝのじや有ませんぜ、お鳥の甥でげすから何分宜しくお願ひ申ます』

花枝は尙不安心の色にて、

『お鳥は何處へか行つたかへ』

『そのお鳥は今追つ拂ひやした處で、少し私の邪魔になりやすからね』

『えッ』

『なにさ、私やお前さんにやアとうから惚てるンだ、此顔は覺えて居なさるめへが、名を聞いたら思ひ出すに違ひれへ、私や長柄の吉と云ふ遊人さ』

花枝はぎよつとして、

『にッ、長柄の吉』

と叫びしまゝ殆んど氣絶せんとせり、過る夜奈良よりの歸途新道に出遭ひたる曲ものは、手拭にて顔を隱したる故その面ざしは知られ、長柄の吉と云へる名は彼が名乘りしにて善く知れり、さては我身は不幸にも長柄の吉に助けられ彼が伯母の家に世話を受け居る事なるか、花枝は始めてわが身の危險なる悟り恐ろしさに有るにもあられず、今はひたすらその身の死せざりし事を悔むのみ、吉はすかさず附よつて、

『へゝゝ新道以來の心中男だ、少しは優しい言葉をかけておくンなせいな

今じやアお前さんの生命は私が助けたのだ、その恩返しに云ふ事を聞いて貰へやしやう、お前さんのその姿を見ちやア默つてはひッこめれへ、病氣上りと云ふ處が一層價値だ』

と云ひつゝつと花枝の袖を捕へぬ、花枝は一生懸命、左はさせじと袖を拂ふて立上り、隙を見て駈出せば、吉は脱兎の如き花枝の敏捷さに呆れながらも躊躇せず、その跡より追縋らんとする刹那、花枝は流石に病後の身とて駈出しは駈出しながら足元定まらずして椽より轉び墮ち、きやッと叫びしまゝ俯ぶしになりて倒れぬ、吉は直ちに花枝を抱き起せしが、こはそも如何に履ぬぎにいたく脾腹を打ちて氣絶したるものと見え、虫の息だに通はずなれり、吉は狼狽ながら介抱し居る中お鳥は酒肴を整へて歸り來りしが此有樣に打驚ろき、

『吉、手前、何うしたのだ』

『どうしたッて、油斷のなられへあまッちよだ、伯母御の留守をかぎ付けてど

ろンをきめやうとするじやアれへか己が見つけて、追かけやうとした處が、
椽から轉げ墮ちてこの通り氣絶したのさ」
「飛んでもれへ女だ、手前、早く抱上ろ、うんにやさうじつれへ、抱いて居ろ
と云ふ事よ、おいその水をよこしなよ、何だこりやもう身体が冷ッちまつた
吉、大變な事になつたな」お島は宛ら掌中の珠を取られし顏つきなるに、
案外吉は沈着拂つて、
「伯母御、もういけれへ、ごれたらごれたでそれ迄だア、五百圓の仕事と思や
ア諦らめもつかうじやれへか、も少し待つて見ていよ〳〵蘇生らなけりや元
の通り川へ突流す迄よ、誰知るものも有りやアしれへや」。

二十一

醫士の山田亮吉は母お勝の望みに任せ櫻の宮の花見んとて、五時ごろより小舟

を造幣局のあたりに浮べぬ、げに春の眺めは夕ぐれに如くものぞなき、遠方
は早や朧ろにして、霞のひまよりほの〴〵と柳櫻の映り合たる、畫にかく
も筆に寫すも共に及ばじなど、母と語らひつゝ行樂に餘念なき中日もはやとつ
ぷりと暮れぬ、岸には火を點し連れて飲めや歌へにさゞめき渡る醉ごれ客掛
茶屋に歸るを忘れ、川にも幾艘の遊山船節おかしく囃し立てつゝ猶春光を弄
ぶあり、亮吉は櫓で船を源八渡の此方に着け、そのわたりに近頃しつらひて、
割に食はせるとか通客の云ひ囃せる何亭とやらんに母を伴なひぬ。
思ひの外に時を費やして亮吉がこゝを出たるは十時許りにやあらん繋きたる小
船に乘りて網島の方を指させば、船は流れに從ふて緩き川水を傳ふる、流石に
心地あしからず、宮の邊に醉ごれの人影も淋れて、春の夜の靜けさを添たり、
亮吉は醉ざめの顏を川風に吹かしつゝ、心地善げに舷に倚りて見るともなし
に川水を見詰居りしが忽ち流れ寄る婦人の屍体を認めぬ、亮吉は驚ろいて聲を

挙げ、

「おい船頭、川陥りが流れて居る」

船頭は舟を停めて亮吉の指ざす方を見やれば慥かに婦人の屍体浮び居れり、

「旦那、何うしやせう、かゝり合が面倒ですぜ」母のお勝は口を挿みて、

「亮吉、マア可愛相な、兎も角も舟へ上げて見ては何うだへ」

「上げて見ませう、時に依つては助かるかも知れない」

と云つて、亮吉は屍体引き上げを命ずれば、船頭は左ればとて直ちに屍体を舟に抱上げたり、

「旦那いゝ女ですぜ、何か助かられへものかなア」

と美い女と見て早速同情を表する現金さ、

「ほんに、まア美しさうな娘だよ、いゝ處の娘さんらしい風では無いか、れへ亮吉もう助かりさうもないかれへ」

と母のお勝は不憫のものよと云ふ様子にてその顔を覗き込ぬ、亮吉は死人には馴居る事とて左まで驚きもせず、心静かに其傍らに依りて撿め見んとせしに、何となく其身姿の見覚えあるが如きに一驚を喫し、行燈を引寄てその顔を見れば、こはそも如何に、この屍体こそは過る日怪しき家にて診察してより心にかゝりて忘るゝ能はざりし、その夜の患者なりけり、亮吉は思はず打叫びて

「やッ、お鳥だ」

見る〳〵中に顔は眞青になれり、お勝は呆れ果てゝわが子の顔を見やり、

「お前、この娘を知つてるのかへ、お鳥と云ふはその名かへ」

亮吉は餘りに胸を驚ろかして、殆んど言葉を出す術だも知らぬものゝ如くなりしが、

「亮吉、何をぼんやりしておいでだ、この娘は全体どこの娘だへ」

と重れて云はれて漸やく心づき、

「いや、お鳥と云ふ名は虚言に違ひありません、どこの娘かわからないので」
母はこのトンチンカンなる答に益々呆れ、
「亮吉、お前、それは何を云ふのだへ」
左れど亮吉は一向無頓着にて返事もせず、たゞ一心に屍体を撫試みぬ、母も詮方なく口を噤みて只其爲す樣を眺めたり、亮吉は船頭に向ひて、
「おゝ、急いで網島へつけて呉れ、大急ぎだ、いくらでも賃金は増してやる」
平生の聲とは思れぬ調子にて、斯く命ぜしまゝ、屍体を手放して腕を拱ぬき、深き思案に沈み、傍に母あるをば全く忘れたるものゝ如し、母は怀へ兼て、
「亮吉、お前の云ふ事はわからないよ、この娘を知つてるのかへ」
この時亮吉は始めて人心つきたるかの如く嘆息して、
「お母さん、この間新町の溫習會にお伴をして歸つた晩、妙な男が急病人があると云ふて來て居りましたらう、あの時の病人が此女で、あの男は自

分の妹だと云つて居つた、けれど何うもさうでは無い、何でも彼の男にかどわかされたものでゞもあらうと思はれて、不憫でなりませんでしたが、愈それに違ひありません、自分で身投をしたか殺されたかの二ツです」
といふ母は此話に腑に落ちぬながら、後でゆつくり聞けばわかる事と詳しくも問返さず、
「家へ歸つて手當をしたなら少しは望みがあるかへ」
「さア何とも覺束ないので」と云ふ中舟ははやくも網島に着きたり。

■二十二

思ふに花枝は一時の絶息に止まりしを、お鳥と吉とは全く死せしものと思ひ込み、淀川に打捨てたるならん、然るに花枝は水中にて蘇生し又溺れ死したるものと覺しくて、少しく水を飲み居りぬ、亮吉はわが家に舁きゆくや否や有らん

限りの手當を施せしに、素より職業柄とて、手當に行屆かざる處なければ、花枝も程なく息を返したり、亮吉は醫學上の大發明にても爲したるかの如く打喜び、殆んど手の舞ひ足の踏むをも知らず、母のお勝は始終心配らしく亮吉の施術を眺め居りしが、その漸やくに息を返せしを見て、これもまた憂の眉を開き、

「おゝ、難有い、難有い」と呟やきぬ、

「お母さん、もう此方のものです、全体が衰弱して居る上へ水を呑んだので すから、後が大切ですけれど、今服藥をさして寢せて置いたら彼是一時間程で正氣に返りませう」

「さうかへ、それならば妾がついてゝやるから、藥でも呑ましたらお前はお休みにするがいゝ」

「いゝへ、何、お母さんこそお休みなさいまし、もう夜が大分更ました」

お勝は不承知の色にて、

「いゝへ、ちつとも眠くは無し、此娘が何うやら不憫に思はれてならないから妾は傍について居よ、その方が勝手だよ、若し異狀でも有たらお前を呼びます、それとも心配なら一時間程たつてから來て御覽」

云ひ出しては一刻の母の氣性を知る故、亮吉は心ならずも母の意に任する事とし、自分は藥局に行きて藥劑を調合し來り、花枝に服用させて、わが居室に退けり、されど亮吉は床の中には入らず、其儘机に凭れかゝり樣々に花枝の身の上を考へ、はたわが身の上に及ぼし、其小説的理想に耽る心より、今夜の奇遇を夢にてはあらずやとまでに狂喜し、この未名も知らぬ彼の美人とわが身の間は如何になり行く可きやと打案じ、或は已は戀に落ちたるか、はた又好奇心のみの所作かと疑ひ、知らず識らざる間に愈よわが心を斫つて眞實の戀に陷らしめたり、又己れは美人の身の上を知らず其心樣をも知らざるに、

早く既に一點の汚れなき處女なる可しと斷定し、斯る娘と一生を共にするは、如何に我履歴に一奇談を添ふ可きぞと、獨り點頭いては獨り微笑みぬ、この戀そも如何になり行く可き。

それは扨置き、お勝は花枝の枕元にまごろみもせず、さもわが娘にても看護するが如く氣遣はしげに打守り居りしが、暫らくして吐息をつき、

『何處の娘かしら、まアいゝ嫖緻の娘だ、そして品もあるし、何處へ押出しても恥かしい事は無い、併し何うして身投をしたのであらう、年頃の娘が身投をするからは何うせ碌な事ではあるまい、そんな娘ではいくら嫖緻が善くても仕樣がない、若しや亮吉の云ふやうに惡漢にかどわかされたとでも云ふ事なら心配はいらないけれど、はやく氣がついて呉れゝば善いが』

と呟やく折しも花枝は眼を開いて訝かしげにお勝の顏を見擧たり、

『おゝ、氣がついたさうな』とお勝は打喜ぶに、花枝は四邊を見舞して、

『こゝは何方でございますか』お勝は柔しき聲にて、

『貴孃は死で川に流れて居つたのを伜がお助け申したのです』

『おやさうでございますか』

と幽かなる聲にて云ひたれど、合點のゆかぬ樣なり、

『貴孃は身投をなすつたンでせう』花枝は驚ろいて、

『いゝへ妾は身投は致しません』と暫し思案をして、

『妾は長柄の吉とか云ふ惡漢に追はれて逃出さうとする拍子に椽から落ちた事までは存じて居りますけれど、それから後の事はちつとも存じません、長柄の吉はこゝに居りは致しますまいれ』

お勝は合點のゆかぬながら、僞りとは思はれねば、痴情ゆゑの身投にあらずと心に喜び、

『まア飛んだ御災難でしたねえ、それでは貴孃は氣絶でもなすつたのを死んだ

と思はれて川へ流されたのでもございませう」

「まアさうでせうかれへ」とたゞ煙に巻かれたる風情なり、

「貴嬢のお名は何と仰しやいますか」

花枝はわが名を知らすを好まれば、暫時躊躇し居りしが、また思ひ返してか、

「江口花枝と申します」

と答へたり、左れど小さき聲にて聞分け難き程なれば、お勝には充分聞取れすして、

「どなた、樋口鼎さんですか」

と云ふ、花枝はまた躊躇したる後、人より云はれたるこそ幸ひ其儘の名にならんと思ひ定めて、

「ハイ、樋口鼎でございます」

お勝は頷いて、

二十三

「おゝ、樋口鼎さんか、それなら貴嬢をこれから鼎さんと呼びませう」

と云ふ處へ、亮吉は遂に掛念に堪ずして此室に入來りしが、母と花枝の語らひ居れるを見て、其恢復の速やかなりしに驚き、

「お母さん、氣がつきましたれ」

「あゝ喜んでおくれ、大層早く氣がついたよ」

花枝は亮吉の方を見やりしが、この人に助けられたるならんと心づき、起直らんとすれば、

「鼎さん、いゝへ、さうしておいで、病人がその心配には及びません」

とお勝は制して云ふ、亮吉は詞の中を聞き咎めて、

「お母さん、今鼎さんとか仰しやつたやうですが」

「それはこの娘の名です、樋口鼎さんと仰しやるのだよ」

かくと聞いて亮吉は扨てこそと云はぬ許りに打ち喜び、

「ハヽア樋口鼎さんか、さうでせう、私もお鳥さんと云ふ名ではあるまいと信じて居りました」

花枝は何の事やら合點ゆかれどお鳥と云ふ名に思はずぞッと身慄ひしぬ、お勝はわが子に向ひ、

「亮吉、お前はお鳥〳〵と善くお云だけれど一体それは何うしたのだへ」

「いや御不審は御尤もです、今お話し申します」と云つて花枝に向ひ、

「私は山田亮吉と申す醫士です、貴孃は御存じありますまいが、私は此間一度貴娘を診察いたしました」

「おや左樣でございますか」と合點のゆかぬ顏にて亮吉を見詰れば、

「いや實は頗る不思議な事で、お母さん、大溫習會にお伴をしたは何日でしたれ、十二三日前ですかれ、何でも其頃です、夜遲く歸りますと、急病人があると云ふて舟で迎ひに來た男が有つたのです、急病人と云ふ事ですから私は早速その男と一緒に舟に乘りました處が、行先は何處とも云はず、ずつと川上の怪しい處へ舟を着けて一軒の茅屋へ案内しました、其時の患者は則ち貴孃です、貴孃は熱の爲め正体は有りませんでしたが、私は貴孃のやうなお方が何うしてあンな茅屋に居るのかと怪しみに堪ませんでした、惡さげな女主人は貴孃を南地へ出して置いた娘だと申しましたが、私はちつとも信ずる事が出來ませんなんだ、そしてお名を尋ねました處お鳥と云ふのだと申しましたが、餘り不似合な名とこれも同じく信ずる事が出來ませなんだが果して僞はりでありました、其節私は貴孃の御容体が氣遣はしかつたのでも一度診察をせんければならんと申しましたが、女主人はそれを嫌つて藥

を四五日分呉れろと申しまた、そンなことの出來るものでもなし、止むなく三日分をやることにして又た舟に送られて歸りましたが黑闇の夜でしたから何の邊か私にはちつとも分らずで、其の後は貴孃の事許りを掛念して居りましたが、今夜計らずもお助け申した樣な次第で、これも私の念が屆いたのでせう」

花枝はじッと聞き終りて、いたく感謝の意を表し、

「まことに何んともお禮の申しやうもございません」と云ふて更らに詞を次ぎ

「お情けにはいつそ殺して下されば」

と潸々と涙を滾しぬ、母は亮吉と顏を見合はして、また花枝に向ひ、

「何ンな辛い事があるのか知らぬけれど、もう妾の家に居るからは何も心配はいらぬから氣を大きくお持なさいよ、また何ンな相談にもなりませう、遠慮なく打ち明けて下されば吃度貴孃の爲めを計らつて進ぜます」

と親切に云ふ、花枝はたゞ涙を拭ひ居りぬ、お勝は重れて、

「鼎さん、貴孃は何うしてそんな茅屋とやらにおいでなさいました」

花枝はわが身の素性をば何處迄も押包まんと決心したれば、素より此問に滿足なる答へをなし得可くもあらず、

「ハイ」と云つて躊躇し居れば、

「貴孃はその茅屋の女主人とお知己なんでございますか」

「いゝへ、妾は長柄の吉とかいふ惡漢にあンな家へ連れられたのです」

「さうでせう、その長柄の吉といふ奴は何うして貴孃をそンな家へ連れ込みました」

と亮吉は云ふ、花枝は當惑顏に、

「何うして連られたのか存じません」

怪しき詞にお勝は眉を蹙めて、これには何ぞ譯があらんと云ふ顏にて亮吉を見

やりぬ、亮吉は花枝に向ひ、

『その惡漢にかどわかされる前貴孃は何方にお出でした、お住居は何方です、今夜は遲くなりましたが、明日は早速お宅へお知らせ申しませう』

花枝は驚ろいて、

『いゝへ、妾は宅と申してございません、ハイ世に捨られた孤兒でございます親もなければ同胞もございません』

といとも哀れにわが薄命を怨へ出たれど、あはれやこの詞は却つてお勝を疑はしむるのみ、

『それまで貴孃は何處においでなさいました』花枝は涙ぐみ、

『ハイそれまでは人の家に世話になつて居りましたが、アノその家を申上る事はちと憚りございますので』

と口籠りがちに答へしが、こは益々疑がひの火の手を添ふる種とはなりぬ。

二十四

花枝はわが身の惡漢の手に落ちたる譯を秘して云はれば、それまでは何處に何を爲し居りしかと云ふ事をも語らず、素より己れの素性をも打明ければ、お勝の疑ひを惹けるも道理にして、お勝は始め痴情よりの入水にあらぬを知りて打喜びたるに引更へ、今は一しほ花枝の鼎を疑ひ老の一徹に人に云はれぬ事ある上はその身に秘事のある故ならん、素性正しく、わが行爲の人に恥づる處なくば誰を憚る可き謂れなし、鼎は汚れたる娘ならんも知る可からずと思ひ込みぬ、左りとてお勝は情に富る性質なれば、花枝を惡まんとはせずして、却つて不憫のものと憐れを催ほしぬ、また其言葉使ひの閑雅にして打上りたるを聞きては、流石に思ひ迷ふ事もありけり。

花枝が身の上を語らぬに就いては、亮吉も心を惱ませしが、左りとて母の如き

疑ひを抱かんとはせず、その花枝を無邪氣なる少女と信ずる心は更に變りなきのみか、花枝の秘密を打明けぬと云ふ一事は、或側より云へば寧ろ亮吉の小說的理想に樂しげなる好奇心を與へぬ、亮吉は花枝を小說中の不幸なる女主人公となし、又其女主人公が不幸なる境遇に至るまでは云ふに云はれぬ譯ある事と假定し、更らに一個の主人公を點出して心に思ふやう、若し其主人公にして義俠心に富み人を見るの明あり、その『云ふに云はれぬ譯』を聞正さずとも善く少女の潔白を信じて其不幸を助くるとせば、如何に情ある高尚なる行爲ならんと、かゝる妄想を抱きて亮吉はその主人公をわが身に引當てつゝ云ふ可からざる一種の感に打たるゝなり、畢竟亮吉は花枝の一言一行を總て潔白なる側より解釋さんとせるなりけり、あはれ亮吉の心は全く此女主人公に捧げられたり、扨も亮吉花枝の行末は如何になり行く可きや。

今日は世を果敢なみたる野崎純一が洋行の門出を送るためとて、網島鮒字の樓上には純一を始め、十人餘りの若紳士連いづれも、膝を崩して酒汲み交せり、こは純一か親友のみ集ひたる送別の小宴とぞ聞えし、五人許りの侍べりたるもの酒間に花を添へていとも賑々しく、一座も亂れ立たる頃、椽の柱に凭れて馴々しく打語らへるは純一と醫士山田亮吉なり、二人は東京にての學友なりとかや、對話は何事ともわかられど、純一は例の打沈みたる容子も見えず、いたく酒に醉ひ居ればか快よげなる調子にて、

『ウム、それは奇談だ、面白いそれで名は知れず仕舞か』

『處が後で知れたよ、樋口鼎嬢と云ふのさ』

と亮吉と同じく醉調子にて云ふ、

「樋口鼎孃、ウムそれからその後談と云ふ奴を承はりたいね」

「さうさ、四五日前の晩だ、母を連れて舟遊山に出掛けたと思ひ玉へ、さうすると婦人の屍体が流れて來るじやアないか、それを引上げて見た處が豈計らんや、僕の忘るゝ能はざりし彼の熱病患者で、則ちその樋口鼎孃と云ふ譯さ、此時の僕の驚ろきと失望は何の位だと思ふ」

「際どい處でお惚氣の伏線なぞは恐れ入るれ、もう解つてるよ、そこはお手のものだから家へ連れて來て親切な介抱を盡したら息が吹返したと云ふのだらう、そこで僕の喜びと滿足は何の位たと思ふか」

「いや君、さう君のやうに冷かして仕舞つては話しが出來まいぢやアないか、考へて見てくれ玉へ、君は尋常一樣の事のやうに云ふけれど、丸で小説的では無いか」、純一は恐れ入つて、

「あゝ僕が悪い、實に小説的だ、僕は鼎孃と君との間は結婚に終らん事を希望するさ、うなれば彌々以て小説的だ」、亮吉は滿足らしく、

「君の云ふが如く今や鼎孃は恢復して僕の家に居る、孃と僕との關係に至つては今後如何になり行く可きや一疑問であるけれど、兎に角僕は小説的であらと云ふ事を考へては獨りで喜んで居るのさ」

「そこで戀と云ふものが成立する、乃ち僕が歸朝の際には夫人山田として鼎孃を拜するを得んことを希望する」

あゝ純一にしてこの鼎孃が花枝其の人なる事を知りしならんには、斯る言葉は夢にもその口より出ざる可きを。

この翌日純一は遂に神戸より外國船に乘込みたり、花枝と純一との間は今や雲外萬里を隔てんとす、再び何れの日か邂逅の機會を得可き、巡り合ふ

も克く其縁を全うすることを得可きか。

二十五

花枝は日に増し快よく今は病床を離るゝに至りたれど、それにつけても心苦しきは知らぬ他人に世話を受け居る一事なり、流石に再び身を投げんとはせず、相應の教育ある身故全く貴重なる生命を捨てんとしたる愚かさを悟り、これよりは獨立して婦人たるの天職を盡し、此の世を益する事業に一身を委れんとのけなげなる考へを起し、遠からずして此の家を去るべしと決心せり殊に亮吉がわれを慕へる素振明らかなるを見ては花枝の心苦しさ一方ならず何づれにしても此の家に留まるべくもあらずと思ひ定めぬ。

母のお勝も亮吉の素振を見て心を痛め、如何にせんかと思ひ煩へり、鼎の如く美くして品位あり、座作進退も閑雅なる娘なれば我嫁としては恥かしからぬ

ながら、其素性もわからずこれ迄何を爲し居りしやもわからぬものを如何にして引入らゝ可き、これはわが子の餘りに熱くならぬ中娘を遠ざくるに如く事なし、左れど家もなし便る方もなしと云へる少女を突放すは忍び難そ處なり、如何にす可きと樣々に思ひを巡らせしがこれぞと云ふ思案も出ず、はては猶一應素性を聞糺して見てからの事にせんと思ひ定めて、花枝を我居室へ呼寄せたり、お勝は花枝の座に着くを待兼れて、

『鼎さん、貴孃を呼んだのは外でもないのですが、何うあつてもお尋ね申したいのですが、妾は是非とも貴孃の素性を申さねばならぬ譯が有つて無理を申すのですが、お願ひですから云つて下さいませんか』

と言葉優しく折入つて云ふ、花枝は差俯むいて暫し言葉もなかりしが、軈て青ざめたる顔を擧げ、

『それ許りは何うぞ御免下さいまし、このやうな御恩を受けながら包み隠した致して、さぞ恩知らずとお腹立でございませうけれど、何うも申上る譯にまぬりません』お勝は吐息をつき、

『それならば仕樣が有ませんもう尋れますまい』

その代り不憫ながら最早世話は出來ぬと云ふ肚を、流石に云出しかねて口を噤みぬ、花枝はもじ〳〵しながら、

『素性を申上ませんからは何か身に不德義な事でもある女とお疑ひでもございませうが、何とお疑ひ遊ばさうと是非もございません』

と云つて更に決然たる顏を擧げ、

『妾は眞心に對して恥づる事は少しもございませんけれど、貴家樣ではこのやうな疑ばしいものをお置き遊ばして嘸御迷惑でございませう、また妾もお蔭樣で身体も丈夫になりましたからは、何時迄御世話になるのも心苦しうご

ざいます、それで實は今日明日にはお暇を願ふ考へなのでございます』

お勝はわが云出し兼居たる事を先方から云はれて、喜ぶより先づ驚ろいて、

『それでも貴嬢は家も無し、便る人もないと仰しやつたぢやございませんか』

『ハイ、ですから妾は赤十字社の看護婦にでもならうと存じまして』

お勝は呆氣にとられ、

『まア、貴嬢が看護婦に』

『ハイ、妾は一生慈善事業に身を委れる決心を致しました』

思ひ込んだる樣子に、お勝はまた忽ち心を動かされ、

『それはマア感心な、誠に珍らしいお心掛です』と座ろに感じ入り、

『それにしても便つて行く人がなくては何かに不自由でせう、斯うなすつては何うです、幸ひ妾の知合のものが京都の赤十字病院に看護婦長をして居りますから、それを便つておいでなされては何うです、妾が手紙をつけて進ぜ

ます、花枝は打喜びて、

『それは誠に何よりの仕合せでございます、何うぞ御紹介をお願ひ申します』

お勝も喜びて、

『それならさうしませう、併し鼎さん、妾からまたお頼みがあるが、伜には知れぬやうに京都へいつて下さい、暇乞もせずに行つて貰ひませう、また妾の處へ禮手紙にも及びません、これには少し譯のある事で、其譯は云はれぬけれど、何うぞ承知をして下さい』

花枝は怪しき事を云ふ事よと思ひながら、強がちに其譯の分らぬにもあらず、

『亮吉様に此生命を救はれながらお暇も申上げずにまぬる事は誠に不本意でございますけれど、貴女のお頼みとあれば是非もございません』

翌日花枝は亮吉が往診の間を伺ひ、山田方を辭して、京都に向ひぬ、山紫に水明なる境も、戀を失ひたる身には如何にせん。此夜亮吉は鼎の姿の

見えぬを訝かり母にたゞせば、母は沈着拂ひていと冷やかに鼎の如き素性の知れぬ女は我家には置き難ければ追出したりといふ、亮吉の絶望と憤怒は一方ならず、是をしも小説的と諦らむる事能はずして、必らず鼎を尋ね出さんと叫べる姿は、宛ら狂人の如し、あはれや其身全く小説的人物となり終れり、それよりは快活の氣象全く變じて沈鬱の性質となり、母につらく人に優しからず幾分か殘忍の性質さへ帶び來るに至りたりといふ。左ても次に花枝と巡り合ふ日は如何。

二十六

花枝の鼎は望みの如く京都赤十字病院の看護婦となりぬ、花枝の如き美貌、花枝の如き氣立の少女に看護せらるゝ患者の幸福はそも如何許りなる可き、花枝は實に病院の花なりき、天使なりき、花枝は患者の心を讀むに巧みにして、

云はれぬ先に其意を迎ふる性質なれば、その介抱は痒き處に手の屆かぬ方もなし、或は患者に代りて手紙を認めやり、或は望みに任して書を讀聞するなどあらん限りの親切を盡したり、左れば花枝の姿を見しのみにて患者は云ふ許りなく心を慰むるなり、その中にも殊に花枝を二なきものと思ひ、花枝の居らぬ時は一方ならぬ心細さを感ぜる一人の患者あり、そは東京の紳士倉島と云へる人の妻、お園と云へる四十餘りの婦人にて、平生神經病を患ひ居る身なりしが、療養旁々京都に來りしに、偶々途の上に行倒れの死人を見しより神經病患者には往々免がる可からざる感應を來し、宿に歸るや否や枕に着き遂に赤十字病院に入院せしもの、由なり。

花枝もまたお園の身をいたく不憫がり、心を盡して介抱せしが、お園は其親切の身にしみて嬉しく、はてはわが身の上までも打明けて花枝の同情を求むる程となりぬ、花枝もまた打明らるゝだけの事をば語り聞せ、世に捨られたる哀れ

なる身の上なるを喞つ折もありしが、お園の同情を得ては流石に慰む節もありけり、お園の身の上を聞くに、良人は我身の多病なるを忌みてか妻としての待遇をせず、仇なる花を園ひて多くはその方にのみ日を送り、左なくば用務の爲とて京阪地方に滞在すること多く、お園の境遇はいとも哀れなるものなりといふ、花枝は此の話を聞いては、益々お園の不幸を憐れむと共に、また我身の上に思ひ至たり、心の中に、

「夫婦の中に情愛のない程、悲しい辛い事はあるまい、あゝ妾が若し純一さんと一緒になつたならば行く末はまア何うであらう、純一さんは少しも妾を愛しては下さらぬのだから、妾は何のやうな不幸ものになるのであつたらう、丁度このお園さんと同じ境遇になるに違ひない、それを思ふと純一さんと添はれぬは此上も無い不幸であつたけれど、若し添つたならばそれより上の不幸を忍ばねばならぬのであつた」

と打咳やき、今は却つて純一と添はざりしを喜ぶに至りたれど、左りとて純一を戀ふる心は昔に變らず、

「あゝ、それにしても妾を思つて下さらぬ純一さんがお恨めしい、これと云ふもみンなあの憎らしいお文さんゆゑ」

純一を戀ふるにつけても流石にお文を憎む心は免れず、是も女心の淺ましさならん。

一日おそのは花枝に向ひ、

「鼎さん、妾は貴孃が親もなく便る所もないお身の上と云ふ事を承はつて無理なお願ひを申したいのでございますが、マアそれを聞いて下されば、妾は何ンなに嬉しうございませう」

花枝は怪しみながら、

「何ンな事か仰しやつて御覽なさいまし、貴女の事でございますから出來るこ

となら何なりと致しませう」

「大層無理な事ですから、と申すのは外でもございませんけれど、妾は身体もだン〳〵快なつて參りました故近々退院して東京へ歸らうと存じますが、こンなに早く快なりましたのも貴孃の御介抱故で貴孃がお出なさらずば妾は何うして快くなる事が出來ませう、殊によると一層惡くなつたかも知れないと思ひます、それにつけても妾は東京に歸りましてからが心配で、また病氣の重る事は目に見えて居ります、妾の病氣は只何となく心細いので慰めて吳る人が無ければ死ぬ程の悲しみを致します」と暫し言葉を切り、

「それで妾はこンな事を考へては獨りで喜んで居るのでございますよ、もし貴孃が妾と一緒に東京の宅へ來て下されば妾は何のやうに仕合はせであらうと、れへ、鼎さん、妾は何時もお話し申す通りの不幸ものでは誰も慰めて吳れる人もない故病氣はいつでも癒る事は有ません、これから將來妾の幸不幸は貴孃

のお言葉一ツにかゝります、何うぞ妾を助けると思召して東京へお出下さいませんか、その代り屹度貴嬢のお力になる程の事は致します」

と思入つて云ふ花枝は兼てより一方ならずお園を不憫のものと思ひ居る故、この詞を聞いては流石に否と云ふ程の力もなく、左りとて折角看護婦となり病院の花とまで持囃さるゝ身の程もなきに退院せんも如何と殆んどその返事に當惑せしが、お園が猶折入つて頼み出るその心根のしほらしさにこれも慈善事業に異りは無しと、遂に其乞に任し、お園と共に東京に行く事とせり。

二十七

花枝はお園に伴はれて東京に赴き、お園の住へる高輪の別荘に起臥する事とはなりぬ、土地閑靜にして四邊には青葉の茂り合ひたる花枝は善き所に來れりと思ひぬ、下男と下婢とのみなれば家の中淋しげなれど、お園は花枝を得てより

心に慰むる節のみ多く、これ迄の如く濕りがちにてもあらず、ついぞ無き笑ひさゞめく聲さへ家の外に漏るゝに至りぬ、花枝もまた心を盡して、お園を勞はればお園もいよ／＼花枝をなつかしみ、宛ら我子の如く別隔てもなく愛くしむに至れり、花枝もまた是が爲めにわが身の不幸を打忘るゝ事もありけり。

花枝が高輪に起臥するに至りてより、月日は只滑らかに過去りぬ、茲には浮世の暴き風も吹ぬならん、あはれ御殿山の花再び春を粧ほひ、品川の月秋を重れて早やくも二年餘りの月日を過しぬ、お園はいたく健康を回復し、今は麗はしき血色となるに至りしが、これ皆花枝の力と打喜ぶ事一方ならず、花枝は今年二十の春を迎へ、其心樣も大人び、其姿も見違へる程となり、美くしさは一しほ優りぬ、たゞ何となく憂ひの相を帶び居るが玉に疵なれど、こは花枝の性來にあらずして、全く心の反映なり、その姿の變はりしには引更へ、月も閲し歳を重ぬるも變らぬものは純一を慕ふの心なり、一生を獨身に

て暮さんと云へる決心は年を追て益々堅くなりゆけり、花枝は素より純一の洋行せし事を知れば其心に純一はとくに其愛する所のお文と結婚し、今頃にさぞ睦じく暮し居ならんと考ては獨り心を惱ませり、嫉妬は女の情なり、お文だになくば純一は我を愛せしならんとは、純一を懷ふ毎に浮び來る聯想なり殊にお文が純一の前にてわれに對し侮辱を與へたる言葉は今に忘られず口惜しと思ふ念の絶ゆる時もなし、あはれ花枝は屑よく純一に對して斷念すると誓ひながら、今は女々敷考へに閉さるゝなり、左りとて純一との緣を自ら取消したるを悔むにあらず、そは純一にして、若われを愛せずば好し夫婦となるとも只不幸を重ねるのみと知ればなり、つまるところ花枝の怨みはお文に歸するより外は無し、あはれの女よ、これ程の嫉妬は人も許さん。

或日お園方に一人の珍客ありぬ、こは過る年歐洲に渡航したる野崎純一其人なりき、さては此程歸朝したるものならん、純一は素より花枝の居るを知り

て尋ね來りたるにはあらず、故純藏とお園の良人とは互に親しき間柄にてその緣故より純一が東京に遊學し居る間は屢々お園方を訪づれ、懇親の重なるにつけても純一もお園方に來るを樂しみとする程となり、宛ら親族にも似たる交際を爲し居たるなりと聞く、お園は純一を客室に誘ひ、其尋ねられたる一方ならず打喜ぶ風情にて、

「まア、野崎さん、善くお尋ね下さいました事、貴君は洋行をなされたと云ふ事を承はつて居りましたが、何時お歸りになりました」

「ハイ、つい一ヶ月程前に歸つた許りです」

「それはまア結構でございます、さぞお樂しみでございましたらう、まアまア善くお尋ね下さいました、久し振りですからほんとにお珍らしい」

「いや前年中の事を考へますと、誠に汗顏の次第で、また其時の御厚情は今に忘るゝ事が出來ません」と云つてお園の顏を見詰め、

「貴女は此二三年の中に大層御血色が善くおなりなさいましたれ、丸で見違へるやうですよ」

お園は莞爾笑つて、

「おや、さうですか、是れには譯があるのですよ」

純一は不審さうな顔をして、

「いやお達者になればそれが何より結構です」

お園もつく〳〵純一の姿を見やりて、

「まア貴君もお立派におなりなさいました事、もう奥さんをお迎へになりましたか」

「いゝへ、相異らすの獨身です」

と悄然たる姿を見て、お園は何を考へてか喜ばしげに、

「おやまアさうですか、いゝ奥さんをお世話致しませうか」。

二十八

純一は氣の向かぬ顔をして、

「私はまだ二三年は獨身で暮す積りです」

お園は笑ひながら、

「おや、なぜでございます、殿達が獨身で善すと云ふのは善い事ではございませんか、お持遊ばせな、ほんとに嫖緻の善い氣立の善い娘をお世話を致します

●

よ」

「ハイ、有がたう」と冷淡に答ふ、お園は眞面目になりて、

「いゝへ、冗談ではございませんよ、緣と云ふものは大事なものですから、妾は滅多に人樣にお世話は致しませんが、今度は自分から望んで貴君にお世話を致したい娘がございますのさ、それはもう足掛三年の間妾が見拔いた

娘ですから、決してわるい事はございません、顔立は云分のない娘で、心立が誠に優しうございますし、それで因循な處は無し、上品な性質で上ツ方のお姫様と云つても恥かしくは有ません、縫針も善く致しますし、教育も有ますしそして思ひやりの深い娘で云はぬ處へ手の屆く質ですから、妾がもう〳〵第一に惚切て仕舞つてるんですよ』と熱心に云ば、純一は笑ひながら、

『何うも仰しやる處では何から何まで云分のない娘ですれ、何處の令嬢ですか

『それは妾の家に居るんですよ』

『へえ』と純一は呆れ顔、

『それは斯うなんですのさ、妾が三年前神經病で京都の病院に入院して居りました節看護婦をして居つた娘で、その時妾はその娘に惚込で仕舞つて、無理にこちらへ連て參つたんですの、今はわが子も同様にして居るんですよ

それは妾が親になつて緣づけやうと思つて居ますのさ』

『では只今も此方に居るんですれ』

『ハイ居ますとも、何ぞ御覽遊ばして、今に呼寄せますから、樋口鼎と云ふ娘です』

樋口鼎と云ふ名は純一の耳に聞覺えあるやうなれど、思ひ出されず、只迷惑相に、

『いゝへ、それには及びません』

この談話はこれにて途絶ねしが暫らくするとお園は純一に向ひ、

『貴君はお宿は何方ですか』

『今朝東京へ參つた許りで、まだ宿と云つて別に取りもしませんが、兎も角荷物だけは芝の元の下宿へ預けて來ました、彼處には五年も長く居りましたしそれに大層親切にもして呉れましたから東京へ來ると是非とも一度は尋ねなけりやアならんのですから』

「おやさうですか、あの下宿は書生宿とは違つて大層奇麗ですから善うござんせう、併し、野崎さん、外にお宿が取つてないならば、妾方へ二三日お止宿になつては如何です、昔馴染に暫らく御滞在なすつて下さいましな、貴君が植へて下すつた櫻が今丁度咲いて居ります」

「あゝさうですか、それは一層懐かしうございます、はア、お差支がなくば二三日御厄介になりませうかれ」

お園は喜んで、

「さうして下されば妾はまア何なに嬉しうございませう」

花枝が一人わが居室に文を認とき居る處へ、事ありげに入來る下婢、

「お嬢様、いまれ小野さんとか野崎さんとか仰しやる若いお方が、出なさいま

したのまアいゝ男よ」花枝は顔を擧げて、

「それが何うしたと云ふのだへ」

「あら何うもしは仕ませんけれど、其お方は四五日御逗留なさるんですつて」

花枝は敢て關せざるかの如く、

「あゝ、さうかへ」

と云へば、下婢は花枝の無感覺なるに張合抜したれど、なほもひるまず、

「ほんとに新駒に似た好男ですよ」

と二の矢を放ちしに、花枝はなほ返事もせず開きかけたる書に見入る故、あゝ憎らしいと云ふ顔にて、下婢は足音荒く室を立去りぬ。

花枝はわが戀慕へる野崎純一がこの同じ室續きに來り居る可しとは思ひも設けず、何心なく椽に立出たるに、この時曲椽の彼方の障子を打明けて椽に立出たる純一と計らず顔を見合はせぬ、花枝は倒るゝまでに打驚ろき、胸の動

悸ばむら〳〵と一時に高まり、心亂れて爲す所を知らず、會釋する暇もなくて我居室に駈込みぬ、居室に入るや否やそのまゝ机の上に倒れかゝりしが、後より純一の入來る如き心地して、穴あらば入もしたくその心苦しさ一方ならず、あはれ戀しき人を目前に見ながら、妻ある人と思へば、わが身の戀は罪惡なり、純一と顏を合すは暫しの間なりとも苦しきに、下婢の話に依れば四五日は逗留するといふ、その間の苦しみを、如何にして忍ばれん、此身は暫し純一を避くるが爲に、一刻も早く此家を立去らんと、咄嗟の間に思ひ浮べぬ。

■二十九

花枝の驚ろきしよりも純一は尙一層驚ろけり、純一は生れて斯くまでに驚ろきたる事なし、今面を合したる娘の姿は、その爲めに獨身を守らんとするわが戀人花枝に生寫しにて寸分も異る所なし、扨ても花枝はあの時に身を助か

りしか、それともわが眼の迷ひか、いやゝ〳〵花枝なればこそ、われを見て居室に駈込みたるなれ、決して他人にては無し、さるにても花枝の居る事はお園も語らざりし、鼎と云ひたるが花枝の事か、純一は何れとも思ひ迷ひて、呆然と彳ずみしまゝ、花枝の入込みたる跡を眺むるのみなりしが、花枝に相違なしと云ふ聲は何れよりか響き來る如き心地し、思はず識らず花枝の居室に向つて歩を進めしが、若し花枝にあらざるに猥りに居室に入らばその不作法を詫ん由もなしと、忽ちに思ひ返し、お園にたゞせばわかる事と、暫し胸の動悸を靜めて後、もとの室に引返して、お園に向ひ、

「奥さん、私は今樣に出て計らずも一人の令孃を見ましたが、あれは誰ですか隱さずに仰しやつて下さい」純一のたゞならぬ顏色をお園は訝りながら、

「おや、さうですか、御覽なさいましたの、あれが先刻申した樋口鼎と云ふ娘です」

『樋口鼎、いやさうでは有ません、江口花枝に相違ありません』

お園はけゞんな顔をして、

『いゝへ、樋口鼎さんです、江口花枝さんと仰しやるのは貴君の御存じのお方ですか』

『御存じ處では有ません、私の妻です、いやあれは私の妻に相違ない、助かつて生きて居つたのだらう、奥さん貴女が鼎さんと仰しやるあの娘の素性をお話し下さい』

お園は何を云ふ事かと益す呆れながら、純一の思ひ入つたる氣色に氣を呑まれて、『貴君は矢張奥さんをお持遊ばしたのですれ』と云ひて純一の容子を伺ひ

『鼎さんの素性は妾も善く存じませんが、先刻もお話し申した通り妾が京都の病院に居りました節看護婦をしてお出なので、何でも看護婦をする迄には隨分苦勞をなすつたやうでございます、何か譯があると見えてそれ迄の事は決

して話ませんけれど、妾はもう鼎さんに限つて不都合のある筈はないと信じて居ますから、無理に尋ねもせずに居るのでございます、兩親もなければ便る處もない不憫な娘です、小さい時から奈良に居つたとか云ふ話ですよ』

この詞を聞くや否や純一は思はず叫び出して、

『それなら花枝だッ』

喜色面に溢れて、手の舞ひ足の蹈むをも知らざるものゝ如し、お園は只煙に巻れて、

『それではあの娘はその花枝さんとやらですかれ、まア不思議な事』

と云ひたれど、更に合點のゆかぬ顔附なり、純一は獨り飲込んで、

『奥さん、花枝に違ひはありません、其證據には私を見て驚いて中へ駈込ました、私はあの娘の爲に何れ程の苦勞をしましたらう、死んだと思つて居つたものが助かつて私の爲にこのやうな喜ばしい事は有ません、死んだ親父にも

云譯が出來ます」

「全体何う云ふ譯か、妾にはちつともわかりませんから、お話をなすつて下さいましな」

「いやこれはおわかりにならんでせうかいつまんで申上ませう、實は私は親父の遺言であの娘と結婚する事になつたのですが、其時私は事情が有つてそれを嫌つたので、花枝はそれを悲しむ餘り身投をしたのです、その時手を驚して捜索しましたけれど、屍骸が上らぬ故、死んだものと諦らめて仕舞ましたので、それから後になつて私が花枝に對する愛は始めて呼起され、なぜ生てる中ちに愛する心が出なんだかとわが身を責むるに至りましたが、最早後の祭で、私は心苦しさに堪へず、又親父に云譯もない處から、其苦痛を忘るゝ爲め洋行をした次第です夫故、今にあの娘の事を思ふ度に胸は張裂くやうで有ました。併し、併し」と暫らく躊躇して、

「其苦しみを最早取除く事が出來ます」

お園は始めて大略の事情を知つて驚くやら喜ぶやら、

「まア〳〵さうでございましたか、鼎さんを貴君の奥さんとはちつとも知らず先刻はお世話を致さうなどゝ申上げて、併しまアお目出度事でございます、

「それで貴君は今ではあの娘をお嫁ひなさる事はございませんれ」

「何うしまして、あの娘の爲に獨身を守らうとした位ですもの」

お園は嗟嘆して、

「貴君の奥さんと知らずにお世話にもなりお世話をも申して居つて、まアこれも因縁ですれへ、貴君が今日お尋ね下さつたのも因縁、何うしてもお兩人の縁は切れない前兆ですよ、何れ一刻も早く鼎さんを、ほゝ、何うも口癖で、あの花枝さんをお喜ばせ申しませう、貴君も一緒にお出遊ばせ」

三十

お園は純一を伴なひ、いそ〳〵と花枝の居室に赴むきしに、如何にせしか花枝の姿は見えず、左れどお園は別に怪しみたる樣子もなく、

「おや何處へ行つたのかしら、鼎さん、鼎さん」

と呼びしがこれ又返事もなし、純一はまづ色を青くして、

「いや奥さん、私の來るのを知つて姿を隱したのでせう」

お園は手もなくそれを打消して笑ひながら、

「いゝへ、そんな事があるものですか、もしやひよつとは〝かりへでも〟と云つて取敢へず下婢を呼び、

「お前、鼎さんを知らないかへ」と問へば、

「お孃樣なら先刻何處へお出ましになりました」

とけゞんな顏をして云ふ、左れどお園はまだ何とも思はぬらしく、

「それなら直に歸つて來るだらう」

と云ふに、下婢は頓馬な聲を出して、

「いゝへ、奥樣お孃樣の樣子が變でございましたよ、眞青な顏をなすつて大層慌たゞしい御容子でお出ましになる故、何方へお出なさいますと伺つて見ましたら、何とも御返事をなさらず、奥樣に宜しく申してお吳れ、だまつて行くからと仰しやつて裏からついとお出ましになりました」

純一は殆んど絶望の嘆聲を發して、

「あゝ、もういけない、花枝は歸つて來ん」と呟やく、お園もこれには驚いて

「まア何したのだらう、默つて行から妾に宜しくつて、何處に何しに行たのだらう」

純一は悲しげなる調子にて、

「いやその譯は判つて居ります」

園は何うも合點ゆかれば、

「まアさうですかれへ」

と不思議な顏をして純一を見やりしが、純一が無言の儘俯むき居る其姿のいたく物に絶望したる如き有樣なるに哀れを催し、己れも安からぬ心むら〳〵と湧來り、一方ならず花枝の身が氣遣しくなれり、純一は漸やくに顏を擧げ、

「奥さん」

と何か物を云んとせしが、下婢が尙けゞんな顏をして二人を見比べ居を見て口を噤みぬ、お園は心附いて下婢を追退け純一をそこに座らして、

「野崎さん、妾はまだ詳しい事を承はりませんから何ンな深い事情があるかも知ませんけれど、あの娘は何で貴君を見て姿を隱しましたらう、れへ、貴君、貴君を慕つて身投をした程なれば、逃隱れをする處では有ますまいに」

「夫には事情もありますし」と純一は當惑さうに云て、

「また花枝も私を誤解して居だらうと思ひます、花枝は屹度私が獨身で居とは思つて居らぬのです、それは思つて居らぬ事情が有ます、それで私には一生面が合はさぬと云ふ覺悟をして居るのでせう、今では花枝の方で私を憎んで居るに違ひありません」

「貴君を憎んで居ますつて、いゝへ、そンな事は有ません、妾は却て一日も貴君を忘れずに居つたらうと思はれます、ハイ、一々思ひ當る事が有ますもの、あの娘は自分では厚親もなく賴る處もなく、それで看護婦になつたと云つて居りましたけれど妾は看護婦になつて、一生を慈善事業に暮さうといふそれまでの決心をするには、よく〳〵の事情があるだらうと思つてましたのさ、それで氣をつけてあの娘の素振を見ますと、平生は陰氣な娘では有ませんけれど、時々自分の室で何を考へてか獨りで泣てる事さへありますので

妾は猶更不憫に思はれて居りました、今思ふとそれはみンな貴君の事を考へて泣いて居たのです、妾はそれ程の事とは心もつかず、時々は緣談の事などを云出して見ましたけれど、それを大層嫌ふ樣子で、すぐに話しをわきへそらして仕舞ひますからその後はつい緣談の事は申しませんでしたが、ほんとに今更思へばあの娘の心があり〳〵とわかつて、誠にいぢらしくツてまア妾は何うしたらぬゝでせう』と涙ぐみながら、

『それで妾は合點がまゐりました、貴君も仰しやつた通り、あの娘は貴君に奥さんのある事とばかり思ひつめて居るのでせう、あの娘の事ですから奥さんのある貴君をこのやうに慕つて居つては道に外れて居ると考へて、それやこれやを思ひ廻はすと、迚も貴君と顏を合す辛抱が出來なくなつたのでせう、それで妾を隱して仕舞つたのです』

とさながら花枝の心事を指さすが如くに云へば、純一は最早聞くに忍びず、われ知らず首をうな垂れて腸はかきむしらるゝが如し。

三十一

花枝は純一と顏を合はす苦しさに、跡先の考もなく、住馴しお園方をぬけ出でしが、胸はたゞ純一を思ふの一念に閉さるゝのみ、口惜しき事悲しき事切なき事の數々は、一時にその身に集まりて心狂はしき許りとなり、はてはお文の事までを思ひ浮べて彌々怨みを重ねつゝ、たゞ何と云ふあてもなく、足元もしどろに芝公園まで迷ひ來りしが、この時始めて身の振方を如何にせんと思ひ出づれば、うら悲しき事一方ならず、殊に差當りて途方に暮るゝは今日のこの身の置處なり、素より知れる處もなければ便る方もなし、そも何として善かる可きと、打案すれば心もなまりて、足の歩みも捗どらず、傍に有合ふ榻に腰打掛けんとせしが、この時、

「もし〳〵、貴孃は鼎さんではございませんか」
と聲を掛るものあり、花枝は驚ろいて其方を見やれば、こは思ひもかけぬわが友にて先年京都赤十字病院に花枝と共に看護婦となり居りし娘なり、花枝は流石に懐かしく、悲しい中にも笑ひかけて、
「おや、貴孃は春野さん、まア何うして」
と云へば娘は花枝の傍に來りて會釋をしながら、
「貴孃こそ何う遊ばして、まア、ほんとに久しくお目にかゝりません事れ」
「貴孃は今では此方にお住居ですか」
「ハイ、貴孃が此地へお出になると間もなく、妾も此方へまゐりましたのですけれど矢張同じ事をしてるんですよ、こゝの赤十字病院に出て、あの看護婦をしてますの、今日は繰合せ休なんですわ」
「おや、さうですか」

と花枝は何心なく云ひしが、忽ち心に悟る處あり、あはれ此身は愚かなる思案に迷ひし事よ、先年看護婦となりたる時の決心に對しても恥かし、その時われとわが身に何と嘗ひたる乎、この一生を慈善事業に過さんとの決心はかくまで脆き筈にては無りしものを、さてもお園方に起臥してよりこの三年が間にその決心を忘れ果たる事の恥かしさよ、今より何をか思ひ迷はん、看護婦になりて惱める人の苦しみを助けんと心に思ひ決すれば、憂はしき色も漸やく晴れ、われとわが心をも勵まして、この世の願ひをば思ひ絶んとの覺悟をなしぬ
先の娘は花枝の顏の青ざめ果居るを見て訝かりながら、
「鼎さん、貴孃はお顏色が大層お惡いやうですが、何うか遊ばしましたか」
と問へば花枝は强て笑顏を作り、
「いゝへ、別に惡い事も」と云つて、更らに、
「あの春野さん、妾はまた看護婦になりたいのですが、貴孃、何うぞ看護婦長

にさう仰しやつて見ては下さいませんか、お願ひですから」

春野と云へる娘は不思議さうに花枝の顔を見詰て、

「貴嬢は今何方に居らつしやるの、二度と又た看護婦におなりなさるッて、まア何ンなお考へですか」

死枝は決然として、

「ハイ、一生妾は慈善事業に從事する決心ですから何うぞお世話を爲つて下さいまし」

「へえ、夫ならお世話を申ますけれど、今何方にお出なさいますの」

「今迄居つた處に何うしても辛抱の出來ぬ事がありましたので、丁度今拔出して來た處ですわ、もう何處と云つて宿はございません」

とこれ丈では事情がわからぬながら花枝の僞はりを云はぬ事を知り居れば、娘は別に疑ひもせず、

「まア、さうですか、それなれば兎も角も、妾の家へお出なさいましな、近所ですよ、それに旅宿と下宿をして居るんですから、もう家ではちつとも迷惑な事はございませんよ、下宿と云つて書生さんは居りませんから、氣のはる事は有ませんよ、そして暫らく御逗留なさいましな、伯母の家なんですけれど、伯母は中々親切ものですから、お出なさいさしな、病院へは家から妾と一緒に通ひませう」と親切に云へば、花枝は人の情の嬉しさに涙を滾して

「それなら御親切に甘へて御厄介になりませう、妾はいつそ病院に詰切うかと思ひますけれど、暫らくの間さう御願ひ申しませう」

かくて花枝は娘に連立つてこゝを立去りしが、この娘の宿が純一のお園に語りし「懇意なる下宿」なりとは神ならぬ身の知る由もなし。

■三十二

花枝はかの春野と云へる娘に誘はれてその家に至り、暫らく世話を受くる事と定めしが、なほ四方山の物語りを爲せし後、春野はまた花枝を連れて病院に赴むきぬ、然るに花枝の經驗ある事といひ、縹緻の美くしき事といひ、氣立の優しげなる事といひ、忽ち看護婦長の氣に叶ひ、早速採用さるゝ事となりしが看護婦長は更に花枝に向つて云ふ樣。

「そのお心掛にはまことに感心いたしました、それで御相談がありますがれ昨日入院した患者の附添が至急の用事が出來たと云つて、今夜暇を吳と願出たのですがれ、この頃は病人許り詰つてるので、代りが一寸なし、それにあの患者は急症で中々手が離せませず、病人を扱ひなれたものでないと困るのですが、何うでせう、貴孃にお願ひ申したいものですけれど、あまり早速で

御迷惑でせうか」

花枝は既に決心したる事とて時の遲速は素より問ふ處にあらず、快よく承諾して、

「いゝへ、もう決して迷惑な事はございません」

と云へば、看護婦長はいたく喜びて、

「早速御承諾下すつて滿足でございます、尤も、只今すぐでなく夜分からで宜しうございます」

「ハイ、何うせ只今からでも夜分からでも同じ事ですから、却つてすぐにお願ひ申した方が勝手でございます」

看護婦長は春野に向ひ、

「それなら春野さん、五十番室ですから何うぞ樋口さんを御案内なすつておゝその姿では何うも不似合です制服に着更へ頂きませうか、今事務室へさう申

しますから春野さん、何うぞ、お世話をなすつて下さいまし』

春野は頷づきて花枝を伴なひ、彼方に立去れば、看護婦長も續いて立去る後に殘りたる二人の看護婦互に顏を見合して、

『まアいゝ縹緻です事れ、あンな縹緻なら看護婦なぞにはならずとも、ほゝゝれへ、さうじや有ませんか』

『妾は看護婦ほどいやな職業はないと思ふわ』

『ほんとに妾もさう思ふわ、それはそうとあの今の五十番室れ、貴孃、御覽になつて(?)、別嬪ですよ、大阪の貧產家の娘ですッて、何でもれ、あの娘を送つて來たものに聞いたのですがあつちで男をこしらへて東京へ駈落をして來たので、三十日許りは男と宿屋に居たさうですが、其中男の方で嫌になつたものか、あの方を捨てゝ何處へか姿を隱したので、あの方はそれから病氣を起したんですとさ』

『じやア嫉妬の病で入院してゐんですか、ほゝ』

『いゝへ、さうじやアなく少てよ、病氣は外の病氣ですけれど、まアそりやア嫉妬も手傳つてるんでせうよ』

と二人は患者の噂に餘念もなかりしが、思ひついたやうに、

『おゝ、さう〳〵二十番へ行つて体溫を測るのを忘れて居た』

『どれ妾も見廻はつて來やうかしら』

と二人の看護婦は右と左に立別れぬ。

花枝は看護婦の服と着かへ、春野に伴なはれて、第五十番室に赴むきぬ、この時患者は此方を背にして伏し居たればその顏をわく由もなけれど、花枝は言葉をかけんとて寢臺の傍に進み行き患者の肩先に手を掛けて、

『もし貴孃』

と顏を覗ぞき込みしが、思はず顏色を變へ、一足下がりてぞつと身慄ひしぬ患

者も花枝の顔を一目見るや否や、これ又痛く打ち驚ろき、あッと叫びてわれ知らず半身を擡げ、

『おゝ、花枝さん、貴送は妾を取殺す積りでせう』

と云ふは紛れもなきかのお文なり、花枝はこの詞に又膽をぬかれて氣味わるげにお文を見詰れば、お文は重れて、

『貴孃を殺したのは妾ではありません、長柄の吉です、妾を取殺さうと云ふのは間違つて居ります、さア、早く彼方へお出なさい』

と云ふ顔、眼中血走りて物凄き事云はん方なし、花枝は愈々驚ろき果て何と云ふ可き術をも知らず、

『そりや貴孃は何を仰しやるのですか』

と問返せしが、お文は之に答へずして、いたく物に怖れしが如く花枝の顔を見詰居りしが如何にせしかゞッくりと枕の上に倒れぬ、此有樣を氣味わるげに

眺め居たる春野はこの時花枝に詞をかけ、

『鼎さん、氣違ひですよ、知りもしない貴孃に取殺されるなんて、ほんとに怖い事を云ふのね、なんでも昨日病氣が精神病がゝッてると云つてたやうに聞ましたッけ、どうしても氣違ひですわ』

と云ふ、花枝はたゞうなづきしまゝ、

『まアさうと見えますね』

と答へて傍の椅子に身を投かけたり、春野は別に怪しみもせず、

『まア今夜の看護は御苦勞樣、妾はもう歸りますよ』

三十三

お文は程なく眼を睜らきて、花枝の方を見やりしが、据りたる眼に艶なく、最早何物をも辨ずる能はざるか、花枝を見ても更に感ずる處なきに似たり、お

文は果して精神病なるか、花枝はこの有樣に驚ろきながら、

「お文さん」

と聲を掛しが、此聲も耳に入らぬと見えて返事もせず花枝はお文が始めにわれを見て叫び出たる言葉を思ふに、この身なば長柄の吉に殺され居るものとせるが如くなるに、尙自分が手を下せしにあらずと辯ずる事の怪しさよ、この身は自ら身投したる事はあれ、人に殺されたる覺えは無し、如何にするもお文の詞は正氣に云ひたるものとは思はれず、さては熱度の高き爲めうかされ居るにはあらずやと、驗溫器をお文の脇にあてがふに、お文は少しもこれに逆らはず、花枝の爲すが儘に任したり、やがて之を取て檢するに四十一度の熱あり、

「どうも、ひどい熱だ、これでは囈言も云兼まい」

と斯く呟やきて花枝は又椅子につきしが、此時わが心の漸やく落着くと共に、平生のお文に對する怨はむら〳〵と胸に湧來れり、この身はわが生涯の仇とも

思ふお文に對し、如何に職務柄とは云へ、親切なる看護を盡さればならぬか、かく思ひ浮べては、口惜しく悲しき事一方ならず、それに花枝の第一番に氣懸りなるは今にも純一が見舞に來りはせぬかの一事なり、素よりお文が葉一の妻と思ひ込み居事とて、此度なども夫婦連立ちて東京に來りしにお文は不慮の病氣の爲め入院する事となりしならんと推察し、それより思ひ巡らすに戀女房の病氣を打捨置く筈なければ、純一の尋ね來る可きは火を睹るよりも瞭かなり、己れは純一に遭ふがいやさにお圍方を逃來りてこゝの看護婦とはなりたるに、今にも純一の來るを知りつゝこの室に居らる可きや、とは云へ看護婦長にはあれ程立派に請合來りしものを今更あの患者の看護はいやなりとは云はるゝ義理でなし、扨ては又た此の病院を逃出づる外はなきか、左なり花枝に取りては此病院を逃出るほど心の晴るゝ事はなからん、左れど斯くては春野に迷惑をかくるのみか、わが決心に對しても、はた又一生を慈善事業に盡さんと看

護婦長に誓ひたる詞に對しても恥かしけれ、此身に意氣地のある上は病院を逃出る事は斷じてなさじ、一度慈善事業に身を委ねんと決したる心には戀もなく願ひもなし、戀もなければ純一に對するは他人に對するが如し、純一に遭へぬ程心弱くてはわが決心の末も覺束なし、若し純一が來りしならば自ら進みても立派に應對をなして見す可しと漸やくに思ひ決しぬ、左れどこは花枝が眞心の制裁なり、人は良心の制裁するがまゝに身を操つるを得ば、聖人君子は升で量る程となるべし、左れば花枝は斯く決心はしながらも純一を戀ひお文を憎む念は尚も胸の底に潜み、今にも純一が來はせぬかと心苦しき事一方ならず、心と心と鬪ひつゝ廊下の足音にも氣を置かれて安き心もなかりしに、忽ち障子を開きて入來る男あり、花枝は胸先づ轟きて、其方を見やるに、こは素より純一にあらず、病院の醫士なればほゝと心を安めたるも、醫士は花枝を見て却つて一方ならず打驚ろきたり、誰か知らん、此醫士こそは山田亮吉そ

の人なれども、久しく清國に漫遊し居りたる爲め、顏は日燒に黑ずみ皆さへも一面に生したれば、三年前の亮吉の姿はなく年もいたく老て見ゆれば、花枝の一瞥に認め得ざりしは怪しむに足らず。

■三十四

亮吉は花枝の姿を認むるや、いたく打驚ろき、暫しは立止まりてその顏を凝視せしも、花枝は純一ならぬに安心し忽ちに首を下て俯むきたれば、亮吉の驚きしを知らず、亮吉は何か詞をかけまほしき樣なりしが、花枝の己を認めざりしを却つて幸ひとするものゝ如く、俄かに嚴格なる姿に返りて、無言の儘つかつかと患者の傍に進み、體溫を測り脈搏を試み、

「いやこれは藥を變ればならぬ」

と呟やき、この聲に悟る處なきやゝ花枝の方を瞥見せしが、これ又何の感じも

なきに似たり、亮吉は何と思つてか眉の邊りをぴりゝと顫はせて、花枝に向ひ

『三十分程過ぎてから藥を取りに來て下さい』

と言葉少なに云捨て、何氣なき樣に病室を立ち去りぬ。

花枝は純一よりも恐ろしきものゝ我身に附纏ひしを知らず、ひたすら純一の入來らん事をのみ掛念し居る中にその日も暮れ、軈て夜の十時にもなりしに純一は遂に來られば始めて安心し、漸やく人心地もつきたるが、今度はお文に對する念のみ積り來れり、お文が先の程より正氣はないながらいと苦しげに寢返りをなし、また堪へ兼ねたる如き呻吟をなすを聞きて、花枝は、

『嘸苦しい事であらう、可哀相に』

と呟やきぬ、されどこは決して心の底より出たる詞にあらず、お文に對する怨みの深きだけに、如何にするもお文の苦しみに同情を表する事能はず、猶病勢の募れかしと祈る程の心はなけれど、わが身の良人を奪ひたる女ぞと思へば、

お文が如何なる苦しみを受くるとも、この身の怨を償ふには足らずと心の底に思ひぬ、左れど己れの良心はわが身にかゝる淺ましき心の殘れるを咎め、既に慈善に身を委ねしからは、假令身の仇なりとも盡す親切と看護とに厚薄はある可からず、是看護婦の天職なりと其身を責めて、強ひてお文に同情を起させ『嘸苦しい事であらう、可哀相に』とは呟やかせたるなり、左れば花枝は己の邪念を避て自ら慰めんが爲めに斯呟やきたるものなるも、心の底とこの詞とは互に一致せねば、われとわが良心に恥ぢて覺えず顏を赤めぬ。

この時山田亮吉は又もや入來りてお文を診察せしが痛く其容体を掛念するが如くなれば、花枝は氣遣はしげな容子をして、

『何うでございませう』

亮吉は大膽につく〴〵と花枝の顏を見詰め居し後、やゝありて、

『中々危篤な病人です、この小壜を置いていきますが、十二時頃に飲ませて下

さい、激藥ですから、三滴丈お呑ませなさい、若し間違つたら生命が有ませんよ、わかりましたか」

といと嚴そかに云渡て一寸程の小壜を花枝の手に渡し、彼方に立去れり。

花枝は小壜を手に受取りしまゝ、眺むるともなく眺め居りしが、何を思ひ浮べてか、思はず身慄ひして立上り、そを棚の上に置き眞青になりてお文の方を見返りぬ、お文は眠りに就きたるか、眼を閉ぢて仰むけに臥し居れり、花枝は寢臺に近よりてじッとお文の顏を見詰め、

「お文さん、妾を不幸のものとしたのはみんな貴孃です、貴孃故に妾は何ほどの苦勞をしましたらう、貴孃があるからこそ純一さんは妾を思つて下さいません、貴孃は妾の戀の敵ですから、この怨みは一生忘るゝ事が出來ません、お文さん、貴孃は純一さんと夫婦になつて、この三年の間に何れ程の樂しみをなすつたか知れないけれど、人間に怨みのあるものか無いものか屹度思ひ

知してあげませう、純一さんを最早貴孃のものにはさせません、ハイ貴孃のものには」

と呟やきさまぬッイと立上つて、小壜を戢せたる棚の前に赴むきしが、この時花枝の顏は死人の如く物凄く、眼尻つり上りて優しきいつもの姿とは思はれず花枝はそも何をなさんとするか、かくて暫し石像の如くそこに突立居りしが、見る〳〵中に神精痳痺せしものゝ如くはたと室の中に倒れ伏しぬ。

三十五

暫らくして花枝は起上り、物に怖れしが如く四邊を見返りて椅子に就きぬ、夜は靜かに更ゆきて、廊下を通る足音も途絶え、何れの室にてか肺病患者の咳ばらひする聲のみ、幽かに聞え渡り、陰氣に打沈みたる事云はん方もなし、花枝は心の苦しさを制し得ざるが如く胸に手を置きて椅子に凭れ居りしが、時計

の針は刻々とわが胸を刻ゆきぬ、お文はこの時より又苦しみ出したれど今は身を動かす氣力もなきかの如く額より油汗を流し、肩にて息をつきながらその度毎に幽かなる氣味わるき呻吟を漏らす有樣、秋の虫の明日をも待たぬ風情なり、花枝は此有樣を見ても更に感ずる處なかりしが、やがて無意識に神經的の氣味わるき笑ひを漏らし、

『純一さんは妾のものだ』

青ざめたる唇にて呻くが如く呟やきしが、再び氣味わるき笑顏を作つて、

『だけれどお文さんの生てる間は、純一さんを取返す事は出來ない』

花枝は斯く云ひて自からわが言葉の恐ろしきに驚ろきぬ、お文の生てる間は！この詞を考へて花枝は思はず身慄ひせり、そはこの詞に伴なふ恐しき願を考へて身慄ひしたるなりお文の生命ある間はわが身の純一に添はん事思ひも寄らず、お文が世に無ものとならば、わが身の戀は始めて全うするを得可し、有の儘に云へば花枝は實に斯く考へたるなり、左れど花枝自分は斯る恐ろしき考を抱く程淺ましくはならぬ筈と、われとわが心を咎むれども、心の底にはこの考の誠に萌し居るを如何にせん。

『その身の戀と幸福とを妨ぐるものを取のけよ、此好機會を空に過さば、その身は生涯苦痛の淵に沈み果つ可し、未來の幸不幸は今日の決心一ッにあり、早く決心せよ、戀を全うし幸福を得んとは願はざるか』

花枝の良心を排退て惡魔はわが耳元にかく囁やけり、花枝はこの心の鬼を排退んとすれども中々に拂ひ得ず、只苦しき夢地を辿るが如く、胸に火水を鬪はせ居りしが、今しも夜半を報ずる時計の音は花枝の耳を貫きぬ。

『サア愈々十二時になつた』

と眞青になりて花枝は呟やきしが、機會的に立上りて白く氷の如く冷えたる手にて棚の小壜を取上げぬ、お文の方を見返れば、

前の如く息も絶え〳〵にいと苦しげに呻き居るを見る、花枝は其枕元に近よりて、

「この藥を呑んだら眠れるだらう」

と壜を口にあてがはんとせしが、何と思ふてか急に手を引きて人に見らるゝを恐るゝが如く四邊を見返りぬ、花枝はそも何を憚るか何故にこの藥を呑ます事を躊躇したるか、暫らくして花枝は、

「二滴、三滴」

といと性急に眩やきつゝ、また壜をお文の口元に當て、そろ〳〵と壜の尻を上ぬ、一滴！、二滴！。

「嗚呼、もし氣のつよい女であるならば」

と花枝は藥を注ぐ手をやめて幽かにつぶやきしが、この時以前の亮吉はそッと障子の影に忍び來りて、室の中を覗き込みたり、神ならぬ身の花枝に素より知

ろ由もなく、更に詞をつぎて、

「圖らず巡り合ひながら何うして戀の仇を生して置く事が出來やう、幸ひ此激藥で」

と云ひつゝ、又も小壜をお文の口にあて、最後の第三滴を流し込んとせり、この時しも心ありてか心なくてか、花枝の手はぶる〳〵と打震ふと見えしが、こはそも如何に、小壜の半ば程の分量はどろ〳〵とお文の口に流れ込みぬ、こは手の打震ひたる過失か、それかあらぬか、花枝は慌てゝその手を引き小壜に栓をしてわがポツケットにねぢこみ、椅子の上に倒るゝか如く身を投かけしが、之と共に恐ろしき細く透りたる悲しげなる呻吟の聲を發し、そのまゝのけそつと椅子より滑り落ちぬ、かくて後は死せるか生けるか身動きだにせず、床の中なるお文の呻吟もはたと止り、夜はたゞ暗憺としてふけゆきぬ。

三十六

花枝が絶息より眼を覺せしは長き後にして、夜はほの〴〵と明ぞめたる頃なりき、花枝はかくて物に襲はれたるが如く、四邊を見返りしが、昨夜の恐ろしき事は忽ち胸に浮び出し歟、あゝと憫れむ可き嘆息の聲を發して起上りぬ左れどこれ將惡夢に襲はれたるにはあらずやと、思ひ惑ひつゝ、お文の寢床を見やるに、お文は白く青ざめ果たる顔は既にこの世の人ならぬを示して怨みがほに花枝の方に向き居れり、花枝は恐る〳〵お文の鼻にわが手を押當て試むるに全く虫の息だに通はず、あゝ昨夜の恐ろしき大罪は夢にもあらず正しくこの身のなしたるなりと、心附いては悲しさ恐ろしさに身も世もあられず、お文の亡骸に向ひて、

「お文さん、妾は何うしてあンな恐ろしい事をしたのか今考へてもわかりま

せん、若し貴孃を助けられるものならば、假令此身を何うしてなりともお助け申します、お文さん、あゝ、最早貴孃は息を返しては下さいませんか」と心よりの祈りをなしたるも、ゆくものは追ふ可からず、悔むとても如何でか及ばん、左れど花枝はつら〳〵昨夜の事を思ふに如何にするも、お文を毒殺せんとまでの惡意を起せしとは、われながら疑はしく、さても打震ひたるわが手の過失か、それかあらぬかと思ひ迷へども、現在お文の死し居るからは何れにしてもわが身の犯罪は免がるゝ由なし「人殺しの犯罪」と花枝は我知らず身慄ひしつゝ、纖弱き娘がかゝる大罪を犯す其心根は鬼か蛇か、わが身は鬼とも蛇ともなり果し淺ましさよ、この身の末は世のみせしめとなりて刑場の露と消え、百萬人の語り草となる事か、世に捨られたるわが身は何と歌はるゝも厭はねどたゞ、一人、一人の人に見下果たる恐ろしの女と思はるゝ事の悲しさよ、あわれわが身は何故にかゝる淺ましき心を出したるかと、今は已れの良心に責

められて、胸は宛ら張裂くごとく有るにも有られぬ思ひなり。

若しこの處へ醫師の入來らば花枝は何と云はんとするか、哀れの女よ、花枝は何と云はずとも、醫師は直にお文の死せる事を見出す可し、左れどお文の死せる原因を知る可きか、彼の小壜を撿ためられなば如何、好し又小壜は撿ためぬにせよ、何故に死せるを見て打捨て置けるやと問はれなば何と答ふるならん、

全く眠り居りてお文の死せるを知らざりしと答ふ可きか、生命に係はる程の病人を托されながら、その病人を捨て眠りたりとは苟くも看護婦たるものゝ、日にさるべき詞にあらず、殊に慈善事業に一身を委ねんと、看護婦長の前にて立派に述たる花枝の口よりは如何にして云出らる可き。

花枝は氣も心も殆んど錯亂して、如何にせんかと思ひ惑ひつゝある間にかの亮吉は果して一人の助手をつれて此室に入來れり、花枝は顏を擧るの力もなけれどもたゞ如何なる人が入來りしならんと、一目其方を見やるに、一人は小壜を

渡したるかの髯多き醫師にて、はやわが秘密を看破したるが如く、鋭どくわれを見詰めぬ、花枝は尚一目とは見返す能はず、思はずぶるゝと慄ひて縮み上りしが、亮吉はいと冷やかに花枝を見やりて、

「病人は何うしましたか」

と問ふ、この一語先づ花枝の膽を冷せり、左れど亮吉は花枝の答へを待たずして、つか〳〵と病床の前に進みゆきぬ、助手も其後より從へり、此室には暫しの間寂寞として針の落つる音もなし、醫師は如何にお文を診察し居れるか、互に顏を見合はせて死狀を怪しみ居るにはあらずや、毒殺と云へる聲は何れを一人の口より今にも云表はされはせざるや、花枝は俯むいてかゝ思ひ巡らし、この瞬間の恐ろしさは、わが髪の眞白に變りしやを疑へり、果して助手は口を開きて、

「何うも死狀が怪しいでは有ませんか」といふ。

■三十七

怪しき死狀と云たる助手の詞は又の如く花枝の胸を刺せり、髯多き醫師は之に何と答ふるならんかと、花枝は生きたる心もなし、然るに亮吉はこの助手の詞には答へずして、鋭き眼にて花枝の方を見返り何をか云はんとしぬ、疑もなく小壜の事を問はるゝならんと、花枝は又更に怯れをなして、身を縮むれば、左はなくて、

『貴孃、暫くこの室を立退いて下さい』

と宣告するが如き調子にていと嚴格に言渡しぬ、花枝はほゞと安心して影の如く室内を滑り出で、裏庭の木蔭にゆきて其下の榻に身を投かけぬ、こゝは木立茂ければ誰とて花枝の居る事を辨ずるものなからん、春の朝の事なれば、葉末の露も匂ひこぼれ、花に鳴く鶯、草に舞ふ蝶、世はたゞ長閑なる樣にて、心

地善き事限りなけれど、花枝を慰むるの便宜とはならぬのみを、花枝は今更思ひ巡らすに、小壜の事を問はれざりしに安心したる愚かさよ、わが身に立ち退を命じたるからは、この身に疑のかゝりたるは明らかなり、後にて二人はお文の死せる原因をも確めたる可く、この身に對する處置などをも語らひ居るなる可し、あゝ如何にせばよからんとまたも、心の鬼に責られ、木の葉のそよぐにも氣を置かれて、更に安き心もなかりしが、忽ち足音の彼方に聞ゆるに驚き木立を透して見返れば、こはそも如何にかの髯多き醫師は、慥かに花枝の居る方を指して歩み來れるなり、こは疑ひもなく我身を尋ねん爲め來りしならんあゝ何とせば善き事ぞ、世にも神にも見捨られたるかと花枝は絶望の呻きをして何れにか身を隱す處は無きかと見廻はしぬ、顏は一點の血の色だもなく、眼は恐怖を帶びて艶なく、その身は打慄ひて風にもまるゝ木の葉に似たり、走り去るも忽ちに認めらる可く、身を隱さんには處なし、あはれ天地の廣きもま

た花枝の一身を容るゝ事能はざる乎。若しこゝに身を投ぐ可き瀨淵ありたるならば、花枝は前後に思案もなく、直ちに入水を遂たるならん、花枝の身に取りて此時程恐れと苦痛と恥辱とを感じたる事はあらず、あはれや今は只わがなせし事を悔ふるの一あるのみ、げにわが良心を欺むきわが名譽を汚し、何故にかゝる淺ましき心をば出したるかと、われとわが身を責めては心の苦しき事例ふるにものもなし。

亮吉は如何で花枝を認めずして立去る可き、忽にして花枝の前に現はれ來りぬ、花枝は恐ろしさに榻の上に身を投げて倒れ伏せば、亮吉は花枝の腋に手を入れて扶け起し、

「鼎さん」

と云つて、其顏を覗き込みぬ、面ざしは宛ながら死人の如く青ざめ果て、眼に悔悟の誠を表はせしその樣の哀れなるには、誰か憐憫の情を催ほさゞらん、亮吉は

重れて、

「鼎さん、貴孃は自分のなさつた事を後悔してお出でせう」

と如何にも優しき詞にて云ひたれど、上せあがりたる花枝の耳にはたゞわれを責むる事とのみ思はれ益々恐れ縮みて差俯むけば亮吉は更に一層聲を優しくして、

「鼎さん、私は何もかも知つて居ります、併し貴孃は決して怖がるには及びません、昨夜の秘密を知つてるのは私許りですから」

花枝は口よりも物云ふ可き眼に無限の哀れを籠めて亮吉を見擧げ、

「私は決してあの樣な事をする積では有ませんでした、何うしてしたのか自分ながら譯がわかりませんのですから、何うぞお情けに」と云ふを遮ぎりて、

「いや、その御心配には及びません、私は必らず貴孃を保護します、貴孃の罪を誓つて世に知らせません、それには譯が有ます、私は貴孃に戀慕つて居り

ますから」この詞は青天の霹靂の如く花枝の耳を打てり。

■三十八

花枝が驚ろいて見上る顔を亮吉はじッと見詰め、わが顔に見覺えはなきかと云へる風にて、暫し無言の儘花枝の顔色を伺がひたり、花枝が亮吉と正しく面を合して、しみ〴〵と其顔を見たるは今が始めてなるが、何うやら其顔の見覺えあるが如く、而も嘗てわが身を助けられたる山田亮吉なるが如きに驚ろき、それか有らぬかと思ひ迷へり、亮吉は口を開きて、

「私の顔にいくらか見覺えがありませう、私は清國を漫遊して居つた爲め、色も日やけに黒くなり、その上髯をこんなに生しましたから、お解りにならぬのは尤です、友人すら一目には私を辨じ得ぬ程で、年も大層老て見えるそうです、併し私は三年前慥に貴孃をお助け申した山田亮吉です、亮吉の

名丈はよもやお忘れにはなりますまい」

花枝は素より亮吉の名を忘れず、左れど亮吉と斯る處にて巡り合ふ可しとは如何でか思ひ設く可き、わが推察は誤らざりしながら、また、今更の樣に驚ろきて、

「おゝ、さう仰しやれば山田さんに相違ございません、あゝ、妾は何うしたら善うございませう」

亮吉に面を合はすを恥づるが如く差俯むけば、

「貴孃は私に秘密を知られて面目ないとお考へでせうが、それは間違つて居ります、私の精神は三年前貴孃を助けた精神です、貴孃の所行を私が認たのは此上もない幸福と思ひます、若し他の醫員であつたなら何うでせう」

花枝も左ならんと頷いて涙に咽び、

「それならば今度も亦妾を助けて下さいますか、妾を隱して下さればこのお